俳　句　雑　誌

水　明

２０２３　５月号

令和五年五月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六巻第五号

《今月のかな女》

砂利にのりて工夫晝餉や初夏の路

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

かな女が或る日見掛けた道路工事の現場の様子を書いた俳句である。大正時代のことであるから、現代のような地面を掘ったり砂利を運び入れたりするショベルカーや地均し用のローラーなどの機械が完備されておらず、人手による作業が主体であったと思う。人目を憚らず、工夫たちが道路の脇に積まれた工事用の砂利の上に席を占めて昼飯を摂っている。おそらく飯がたっぷり詰め込まれた土方弁当であろう。（鬼之介・註）

水　明

第1112号

―華の一句―

校庭に君と僕だけバレンタインデー

永野史代

殉教死したローマの司祭ウァレンティヌス（バレンタイン）の記念日二月十四日に、愛する人に贈り物をする習慣のバレンタインデー。日本では一九五八年頃から女性が男性にチョコレートを贈る習慣として続いてきたようだ。作者がたまたま見掛けたバレンタインデーの一光景が、数十年前の自分と彼との心ときめく想い出につながった。ぼくに変身した作者である。　（鬼之介・推薦）

水明

令和５年
５月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
雅風（作品）　鈴木康世　6
花ミモザ（近詠）　菊池ひろこ　7
藤棚（近詠）　五明昇　8
百尺竿頭　※主宰作品の鑑賞　井口俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　十倉和子　西山貴美子　永野史代　ほか　12
季音「月」（同人作品）　大場順子　梅澤佐江　正木萬蝶　ほか　19
季音「花」（同人作品）　曲淵徹雄　日髙道を　笹本啓子　ほか　24
『水明誌』を繙く　干場達夫　29
現代俳句鑑賞　網野月を　58

令和五年　水明賞　30
令和五年　季音賞
令和五年　かな女賞
令和五年　鼓笛賞・山紫賞
令和五年　新珠賞
選考経過
受賞のことば
新珠賞選考経過

六賞発表

新季音同人発表
俳誌望見　梅澤佐江　60

水明集　篠﨑紀子　森下山菜　菅原真理　ほか　61

水明集作品評　山本鬼之介　72
水琴窟（水明集三月号鑑賞）　池田雅夫　76
山紫集　78
鼓笛集（同人作品）・私の一句　84
春の吟行会の記　曲淵徹雄　88
水明例会報・各地句会報　90・93
風声・発展基金御礼　101・97
後記　102

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

雅風

山本鬼之介

腕ひろげ乗込鯛を待つ男

逃水に背中見すれば追ひくるか

酒星や思ふわが身の近未来

囀を聞きわけてゐる鳥オタク

篁や春の眠りを誘ふ風

陽炎がおいでおいでを無縁墓

道すがら聴きゐる話春しぐれ

荷風忌や万年筆の掠れ癖

花ミモザ

鈴木康世

垣統ぶる薔薇の芽園に人気なし

教会の小さな十字架風光る

初蝶のふはりと消えし園の裏

廃園のマリアの台座春埃

園庭に差す日やはらか花ミモザ

空耳か蝶追ふ児らの声を聞く

立て看板の文字の薄れや草青む

暖かな日が続いたので散歩の足を少し伸ばして見る。以前通った時ミモザが咲いている所があったのでそこ迄行く。教会と幼稚園があったが、園児の声がなくマリア像も無い。教会も閉ざされている。でもミモザは溢れんばかりに咲いていた。移転しましたと書いてある。三年の歳月を思う一刻になった。

急に疲れを覚える。何時もの坂の上迄戻ってほっとして下を見たら、白蒲公英が群生していた。散歩に出て良かった遠富士を見て帰る。

藤棚

菊池　ひろこ

詩を待つや虻花房へホバリング

家長不在二階へとどく藤の棚

留守まもる男子幼年藤の雨

弟に禁止事項や藤咲く樹

祖母を撮るアングルさがす藤の昼

夕藤や陽のあたりゐる防空壕

他家訪へば白き藤棚地を這へる

かつて住んでいた家には一階から二階におよぶ藤棚があった。戦後、和洋折衷の洋の部分を当時の進駐軍の将校の家族に貸していた。藤は実となり、やがてその落葉は二階部分のテラスの排水溝に溜まる。それを除去しないと一階の部屋への漏水となるのであった。母は「雨漏り」を意味する「リーク（leak）」なる言葉をいやでも覚えた。その後、日本は独立し進駐軍も姿を消す。我々がこの家を去るまで、藤棚は健在で花房を揺らしていた。

百尺竿頭

◎主宰作品の鑑賞

五明　昇

二月号

人間が神を演ずる里神楽

里神楽は宮中の御神楽（みかぐら）に対し、諸社や民間で行われる神楽で、笛・太鼓・銅拍子などの鳴り物に合わせ、仮面をつけて黙劇形式で舞うもの。演目は「天之岩戸」「天孫降臨」などの神話や神社の縁起などが中心で、これにひょっとこ、おかめの滑稽がからむこともある、まさに人間が神を演ずる一齣で、各地の祭礼では欠かせぬ出し物となっている。

股立や弓矢始めの少女子（をとめご）よ

新年になって初めて弓を射る弓矢始（初弓、弓始、的始）は、もともとは宮廷行事であったが、武家の行事として引き継がれ、今も各地の神社や弓道愛好家の間で執り行われている。「股立（ももだち）」は袴の腰部の左右両面のあきの縫止めの部分。うら若き少女子が袴の股立に、白い道着を覗かせて弓を射る様はいかにも初々しく、新年の風情が漂っている。

買初は「日比谷花壇」のばら五本

バラは地球上で最も美しい花と言われ「花の女王」とも呼ばれる。この花には贈る時の本数で様々な意味があるが、五本のバラの意味は「あなたに出会えた心からの喜び」。妻や夫、恋人など大切な人に、普段は言えない想いを改めて伝えるプレゼントだ。買初めに名代の「日比谷花壇」で赤バラ五本の花束を求めた作者の、胸のときめきが聞こえる。

勤行は法華の太鼓寒びより

日蓮宗・法華宗などの寺院で朝晩の勤行の際、読経や「南無妙法蓮華経」の題目のリズムを整えるため打ち鳴らされるのが団扇太鼓で、「法華の太鼓」とも通称される。円形の枠に一枚の膜を張り、撥で叩くとドーンドーンと残響のある太い音がする。晴れわたった穏やかな寒日和の下、本堂から洩れる太鼓の音色も「だんだん良くなる」ようだ。

大寒や飛行機雲が斬り結ぶ

飛行機雲は、飛行機の航跡に生成される細長い線状の雲で、ジェット機などのエンジンから出る排気ガス中の水分、あるいは翼の近傍の低圧部が原因となって発生する。その飛行機雲が航路の関係で交差し、斬り結ぶ二振りの白刃のように見えたと言う。大寒のピーンと張りつめた大気の中で、天空に

相討つ龍虎の像は時空を超えたロマンを感じさせる。

三月号

寒もどり鉄道模型はしる部屋

暖かくなりかけたと思ったらまた寒さがぶり返したある日、朔風に押されて入った博物館の見事な鉄道パノラマに、思わず息を呑む。鉄道模型は車両が走る線路などの「レイアウト」と、沿線の景色を楽しむ「ジオラマ」が立体的に組み合わされた蠱惑的な構成が売り物。世界的に有名なコレクションを収蔵した原鉄道模型博物館の他、青梅・京都・大宮の鉄道博物館でも臨場感溢れるショーが演じられている。

明治座へ向かふ足取り春時雨

明治時代からの長い歴史を持つ「明治座」は東京を代表する劇場の一つで、戦後昭和の一時期までは歌舞伎や新派の殿堂として知られたが、その後は時代劇俳優や演歌歌手が座長となった歌謡ショー（座長公演）が中心となっている。人形町駅から明治座へと向かう日本橋浜町界隈には、昔ながらの路地と新しいビルが混在する下町ならではの風情が漂う。春時雨の中を、足取りも軽く歩む作者の姿が目に浮かぶ。

光るものなき骨董市や実朝忌

鎌倉幕府三代将軍で歌人としても知られた源実朝の忌日である実朝忌（陰暦一月二十七日）と、同時期に行われる骨董市とを取り合せた一句である。骨董市は全国各地で開催されるが、中でも調神社境内で毎月第四土曜日に開かれる「浦和宿ふるさと市」は関東最大級。室町や江戸の器・布地を中心に昭和レトロなおもちゃなど古いものがズラリと並び、過ぎ去りし古き良き時代を偲ぶ懐かしい光景が広がる。

観梅や切つた張つたの日日忘れ

「切った張った」は、もともとは暴力による非情な、殺伐とした様子を表す言葉で、昨今はやりの「コピペ」の事ではない。血の気の多かった青年期やビジネス社会でライバルとしのぎを削ったのも昔のこと、今は静かに梅の香を楽しむ作者がいる。斯くいう筆者も冬枯れの中で目を惹く紅梅の温かさや、白梅の凛とした美しさを感じるようになったのは何時の頃からだろうか。読み手の来し方に思いが及ぶ一句だ。

春菊買うてロマンスグレーバスを待つ

春菊は特有の香りを持ち、冬の葉物野菜として鍋物に欠かせないが、サラダや和え物・炒め物などにも多様な用途がある。ロマンスグレーの魅力的な紳士が春菊と思しき袋を提げてバスを待つ様は、さまざまなドラマを予感させる。一家団欒のすき焼きか、単身赴任の侘しい夕餉か、はたまた高階のマンションでの秘めやかな語らいか……。余計な詮索をしつつ、なかなか来ないバスを待つ作者の心情が偲ばれる。

硯箱

◆季音三月

井口俊晴

寒鴉哲学の目となりおほす　西山貴美子

夕暮れ時、鴉が電線でじっとしている様子は荒涼とした冬の景だ。ゴミ漁りがたたって、嫌われ者のイメージが定着してしまったが、ここでは瞑想に耽り、考え深い哲学者の目をしている。さて、鴉は本当に哲学者なのだろうか。ＮＨＫの人気番組「チコちゃんに叱られる！」の人気キャラクター、カラスのズン吉に聞いてみた。「それは西山さんが正しい！ドイツの哲学者ヘンペルの『カラスのパラドックス』というのがあるよ」だって。ちょっと調べてみては…。

瞬きは見ても見えない初鏡　網野月を

お正月だからと言うわけでもないが、鏡に自分の顔を映してみた。すると、向こうからじっとこちらを見ている男の顔があった。それこそ瞬きもしないで、視線が痛いくらいだ。だが待てよ。一体全体、瞬きする自分は鏡に映るものだろうか。その瞬間は目を閉じているわけだから、鏡を見ていても瞬きは見えないはず。ああ、ややこしい。

竜の玉潜る小犬の尾が嬉し　高島寛治

竜の玉が好きだ。庭の隅の細く、みっしり茂った葉っぱをかき分けると、コバルトブルーというのだろうか、青々と透明感のある直径五、六ミリの可愛い実が現れる。ふだんはお日様の光が届かないような感じだが、小さな犬が一生懸命に鼻を突っ込んで、何がそんなに嬉しいのか、短い尾をしきりに振っている。竜の玉と子犬、愛らしい者同士の姿に、思わず顔がほころぶ。

若水の珈琲苦し戦なほ　内田恵子

若水とは「その年、最初に汲む神聖な水」のことで、飲むと一年の邪気を払ってくれると信じられている。元旦の午前四時ころが最も水が澄むとされているが、最近は水道水やミ

ネラルウォーターも「若水」扱いしているらしい。その若水で淹れた珈琲が苦いのは何故だろう。ロシアによるウクライナ侵略は多くの人の命を奪って、なお解決の兆しが見えない。戦争は本当に嫌だ。

一軒家に真つ赤な外車お正月　　西浦千枝子

お正月になると、いつも顔を見せない子供たちや親戚が訪ねて来て、急に騒がしくなる。ご近所にもそんな来客が…。それも築何十年、木造の一軒家の前に真っ赤な外車！顔が映るくらいピカピカに磨かれて、まるでハリウッド映画に出て来そうだ。この何とも不釣り合いな情景にびっくりした顔が、これまた愉快だ。

初東風や湯屋の煙突晴れ晴れと　　曲淵徹雄

あの菅原道真の歌が思い浮かぶ東風、寒い北風が去り、いよいよ春の訪れだ。でも、春一番と違って、こちらは強い南風ではなく、東から吹いてくる優しい春風だ。近所の銭湯の高い煙突から出てくる煙は、当然のことながら、晴れた青空を西に向かってゆっくりと流れていく。考えてみると、もう長いこと銭湯にも行っていないなあ。きょうは九千歩も歩いたことだし、ちょっぴり汗を流そうか。そんな気分にさせる午後のひと時である。

彼方よりウインク届く冬の星　　原田秀子

マリリン・モンローのウインクした顔をプリントしたTシャツがあるのをご存知だろうか？ネットでも買えるらしい。ウインクとは、それほど人をドキドキさせるものである。それが冬の夜空に輝く星から届いたものだとしたら。シリウス、オリオン、ベテルギウス、天の川を挟んでキラキラ輝く一等星のウインクだ。例えばシリウスは意外に近くて、地球から八光年の距離にある。つまり、八年前のウインクだ。因みにベテルギウスは六百四十二光年、オリオン座はなんと千四百光年。ウインクしたことなんか、とっくに忘れてしまっていらあ！

面食らふ家電の故障寒に入る　　宮崎チアキ

おー寒い。そりゃそうだ。もう寒の入りだもの。それにしても困ったぞ。エアコンが故障してしまった。さっきまで元気に動いていたのに、今はウンともスンとも言わない。炬燵はないし、石油ストーブはとっくに処分してしまった。近所に電気店はあるが、エアコンとなると、電気ポットを買うようにはいかない。本当に面食らったなあ。

季音雪

春場所

十倉和子

春場所や川面を弾む寄せ太鼓
観光筏は完成間近春の川
豊漁の汽笛鳴りづめ鰆東風
蝌蚪生る脱ぎ散らしたる子等の靴
阿修羅にもいくさの記憶遠山火

梅の白

永野史代

粥炊いて胸透きとほる梅の白
母の死を弔ふ梅の白さかな
校庭に君と僕だけバレンタインデー
下駄箱にバレンタインの日のカード
薔薇の芽に棘人間に毒舌

彼岸会

西山貴美子

彼岸会や秘色の法衣風はらみ
彼岸会の目蓋されば曼陀羅華
その下に氏子集ひぬ藤の花
矛先の些か外れて春の風
水温む曙杉の影ふえて

雛の唄

波多野寿子

ほのぼのとかはたれどきを雛の灯
愛らしき曽孫（ひこ）の声量雛の唄
此れは此れは雪降り止まぬ彼岸入
空青く経らうらうと彼岸僧
楽しげな水のおしやべり春の川

竹馬の友

星野和葉

ささごとや丑三つ時の雛たち
せめて眼をつむらせたきや雛納
語部の声に深さよ涅槃西風
真直には歩けぬ浜辺涅槃西風
蕗味噌や竹馬の友と地酒くむ

春が来た

茂木和子

尾が紫の獣を探す春の山
日当るも昃げるも嬉し春の山
籠もり癖一気に放つ春の野に
放たれし子は喊声をたんぽぽ野
自動車の窓全開に木の芽風

春三月　矢作水尾

三月の光あふるる花時計
能面に見つめられゐて春寒し
観梅の枝の彼方に駿河富士
山襞の藍ふかき日や白鳥引く
陸奥の十年（とせ）を思ふ揚ひばり

花見船　山中みどり

墨堤の桜大川に屋形船
花見船幇間役の都鳥
一抹の寂寥満開の桜土手
船頭の揚ぐる天ぷら蕗の薹
桜色に暮るる大川屋形の灯

小町針　柚木治子

うしろより抱かるる心地春ショール
着姿を引き締む袱紗春の庭
半仙戯官女とまがふ薄衣
ぶらんこを捨てて飛び込む母の胸
夕蛙半襟ぴんと小町針

混沌と　由良ゆら女

混沌と宇宙のはじめ蝌蚪の紐
蝌蚪に透く赤き鼓動や日が昇る
清濁を併せなにはを春の川
うかれ猫地下の鯰を興すなよ
身を焦がし星となるまで春の猫

巣鴨界隈　網野月を

春風や大衆食堂大騒ぎ
あをあをとあをさの決まる春の空
庚申の三尸の虫やひな飾る
春陽やフリーサイズの赤パンツ
狛猿や百度柱の春日中

春一日　石井喜恵

行く先は決めぬ旅立ち春の山
春の山高嶺に雲の光り合ふ
火の山も鎮もる山も春の山
草摘むや弾む近道丸木橋
若鮎の気負ひの眼放流す

おもかげ　石山かつ子

おぼろ夜の友達以上鳩サブレ
能面のおもかげ春のチーズケーキ
太陽に花粉光環春愁
白鳥帰る体内時計信じつつ
蜥蜴出てしばらく宙を見てゐたる

土筆つむ　大橋廸代

土筆摘む観音さまの視野の土手
鳶と鴉の杭奪りゲーム春の川
鷺五羽に一挙きらめく春の川
女四人で起こす単車や涅槃西風
スケボーの子らに石蓴の浜の風

首尾の松　大村節代

折本に付箋ちらほら春ぬくし
絆創膏ゆつくり剥がす春の宵
首尾の松目ざし吉原春袷
割り勘で飲んで別るる木の芽時
青饅や松籟を聞く山の宿

はるかげ　小倉倭子

遥かげの薄墨いろや鳥帰る
小鳥帰るジーンとしてきし母ごころ
掌を合はせ天を仰ぐ児白鳥帰る
白鳥帰る美髭を撫づるカメラマン
白鳥引くや視覚聴覚一直線

さくら　栢尾さく子

混沌と有限無限花烟る
あの人を探す目つきで桜見る
爛漫の桜のうしろ黒い影
君逝きて麻雀荘に花の雨
三寒四温旅立つ人を案じゐる

たんぽぽ　菊池ひろこ

たんぽぽの上とほり来し風に倦む
初蝶来昭和以来の深廂
春疾風名のある星を見失ふ
春の雪土器の文様蛇に見ゆ
梅東風や干菓子老舗の早仕舞

春嶺　五明　昇

雪解や吐息ほのかに陸奥の山
余寒なほ足湯に交はす旅談義
十州に連なる信濃春の嶺
諳んずる北信五岳山笑ふ
四方の山校歌に称へ卒業す

光のつぶて　境　延昭

川の瀬を光のつぶて上り鮎
四阿へ爪先上り梅真白
春の風邪目覚めにさがす夢の色
摘草や社名のロゴの紙袋
春の昼ホームでガムを噛む女

孔雀の春　椎野　美代子

春の雨しつぽり烟る白孔雀
羽根少し乱るる孔雀春愁
孔雀全開求愛の春白昼
春の闇白夜醸せし白孔雀
印度孔雀光背なせる春の月

春光　島津　初花

滋養といふ言葉は失せぬ寒卵
白塗りの面麗はしき雛人形
あくがれの師は胸に咲く紅椿
春光に魚干す女の漁師町
春光に魚の目青く光りをり

花辛夷　鈴木康世

風光る唸る幟の括り猿
己が影に待つてと追ふ児うららけし
花辛夷富士に根強い噴火説
雨あがり土手の土筆の総立ちに
琥珀色なせる切株草青む

春の宵　田寺玲子

さざ波の浅春の川照り翳り
料峭の水面に大き泡一つ
古里の歴史ひもとく春の宵
亀鳴くや木地師の村の水底に
春の雷夜明けの天地躍動す

座談会
最近の名句集を探る
甲斐由起子『耳澄ます』
成田一子『トマトの花』
佐藤りえ『良い闇や』『ぺこぽこ宇宙』
『いるか探偵QPQP』
司会●筑紫磐井
大西朋
望月周
望月とし江

●巻頭三句
矢島渚男
堀本裕樹
宮谷昌代
小路智壽子
吉岡乱水
東海林さくら

●今月の華
小沢真弓
正能文男

●俳句と短歌の10作競詠
坪内稔典
福島泰樹

●好評連載
成瀬政博
とりあえずの日々
筑紫磐井
俳壇観測
坂口昌弘
忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人
句の手触り、俳人の響き
大西朋
俳句へのまなざし
神作研一
てのひらの江戸
―古典籍を旅する
藤村公洋
俳句のつまみ
二ノ宮一雄
一望百里

宮崎斗士
「海原」第一回兜太祭吟行記

俳句四季
Haiku Shiki
2023年6月号
5月20日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/
東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

春

大場順子

すべり台一直線に下りて春
かがやける早瀬の弾く上り鮎
良き文の届き本復春の風邪
春塵ごと家移りの荷をほどきけり
大声の谺を返し山笑ふ

包丁塚

正木萬蝶

内親王の通ふキャンパス鼓草
春埃舞ふ白日の兜町
非常口のピクトグラムや春の闇
春雷や包丁塚に緋の鳥居
分校にきらきらネームたんぽぽ野

天のふところ

梅澤佐江

夕ぐれは慎ましやかに鼓草
落椿光悦垣の華やげり
白鳳仏の気高さに似て白椿
切り貼りの花の浮き立つ春障子
初雲雀天のふところより美声

ミモザ咲く

森本早苗

白無垢の花嫁が行く春の川
億万の星の降臨ミモザ咲く
花見鳥遣る気スイッチオンとなる
春の川耳目塞ぎてかづら橋
春の宵藁焼き鰹と「土佐鶴」と

春草

鳥羽和風

我先に世間見たがる土筆かな
蕗味噌の苦味楽しむ箸休め
擂鉢を飯で洗ふや木の芽和
筆の花風に吹かるるくづし文字
花辛夷行くほど懐し奥の院

春の泥　井上燈女

小米花窓なき納戸に人の声
飛び石を奪ひ咲きたる犬ふぐり
髪切つて身軽となりし建国日
地下足袋の乾きつつ反る春の泥
春日傘三十路艶めくおくれ髪

山笑ふ　松宮保人

春雪や大樹の梢動かざる
梅が香の湖へ傾ぐる薄暮かな
静寂のダム湖残して鴨帰る
児が駆くる婆は後から山笑ふ
緩やかな鯉のうねりや温む池

光となりて　丸山マスミ

野川まだ水音浅し蒲公英野
たんぽぽの絮ふはふはと巫女溜り
調教馬の靡く鬣風光る
滾る瀬を光となりて翔ぶ小鮎
その台詞待つてましたと春歌舞伎

桜餅　藤澤喜久

斜交ひに鳥影過る春障子
古時計止り螺子捲く花曇
花の裏見せて桜の水鏡
下戸上戸長命寺の桜餅
春宵や喜色のタワー侍ジャパン

春の月　松井由紀子

あと一輪予報士が急く初桜
春寒し眇の魚を煮付けをり
老ひとり酔ひて候春の月
春雷や鱗粉光る昆虫館
庭の花あつめ供ふる入彼岸

春の風邪　高島寛治

急流に跳ぬる小鮎の身の熟し
揺れ動く水底の魚春兆す
生返事ばかりしてをり春の風邪
水漏れは分からず仕舞春の風邪
港町無人番屋の流氷期

水準器　池田雅夫

春空を指して飛行機雲逸る
試歩の径春光に身を委ねけり
数へても数へても数合はぬ蝌蚪
春宵の鐘の余韻の風波かな
春の湖大仕掛けなる水準器

梅ほころぶ　町野広子

唄ふごと語るごと梅ほころびぬ
新作の練切菓子や盆の梅
紅梅を残して母家解体す
兄妹三組全校十人春の山
薔薇の芽や声よく通る四才児

初桜　山田美佐尾

初桜吾が産土の目黒川
初桜湖面に映る富士の峰
静止せるタクトに拍手春の夕
ぴたりと止まる六方の足春歌舞伎
仏壇の部屋に薄陽や春障子

芽生え　森川義子

確りと母の筆文字雛納め
菖蒲の芽生え光陰の水明り
高階の視野に堂塔鐘霞む
春光の潮目遥かや巡視船
春寒の卓に訃報の走り書き

うららか　福田千春

口あけて眠る隣客春の昼
仔犬まろまろたんぽぽを踏み荒す
たんぽぽの所為(せい)少年は落球す
白魚や踊るかたちに椀の中
うららかや御者粛粛と馬車の列

涅槃西風　内田恵子

恐竜の骨格模型涅槃西風
my枕持ちて旅せり涅槃西風
石畳の角に躓く余寒かな
春の風邪紅茶に浸すおせんべい
まばたきのゆるりと赤子初蝶舞ふ

春寒し　荒井倶子

有明の薄氷にある風の跡
恋猫に一瞥なぐる去勢猫
ふきのたう添へて山家の手打ち蕎麦
道化師の作り笑ひや春寒し
還らざる北方領土鳥帰る

水田明り　松本光子

春の闇水田明りに人の声
農小屋の出口にひかる春の闇
利根堤蓬だんごのみどり濃し
鳥籠の目白逃がせし坂の上
桃の花農婦つと立ち腰さする

春は睡たいの　渡辺舎人

眩しさのただなかの別れ卒業す
北窓開く地獄の門にロダン居す
春泥に溺れ手提げのお母さん
指揮棒に山河のそぞろ春二番
四歳女宣布波流者睡甚能

揚雲雀　井上玲子

波音のとどく旅寝の春障子
安曇野の空はステージ揚雲雀
青空へ音符を散らす揚雲雀
夕雲雀茜に沈む秩父嶺
若鮎を食べて身ぬちをかがやかす

山菜　松山清子

ベランダに栗鼠遊び来る木の芽時
三味の音の春風に乗る吾妻橋
人に嘘せ河津桜の色に嘘せ
ひとり住む小さき部屋にも紙雛
山菜の苦味好もし宿の春

春の潮　上戸千津子

春宵や尺八の音の清清と
訃報にも故郷遠しおぼろ月
ゆつたりと汀を濡らす春の潮
縄張りの争ひめくや春の山
春郊の草の弾力足軽し

恋する猫　井口俊晴

ジェンダーの騒ぎを余所に猫の恋
猫の恋悪い男に捕まるな
卒業生きようで最後の遅刻坂
ぼけ封じ願ふ神社に木瓜の花
湖岸往く電車見送る蜆舟

無人駅　野口和子

縁欠けし益子の花瓶梅の花
桜の芽小さき箱型無人駅
春蘭やちちははの顔に似てきたり
地下足袋を干して耕人九十歳
桜もち葉を食べる人残す人

藤の花　西浦千枝子

前かがみの菩薩立像藤の花
春セーター編むよちよちの曾孫に
春の川追はれし鷺のその先は
花の色忘れしままに根を分くる
茅葺きの生家をおほふ柳の芽

地虫出づ　川崎道子

地鎮祭の青竹址に地虫出づ
春光や潮入り川に魚の影
山笑ふ怖づ怖づ渡る丸木橋
寄り添うてのひら浸す春の川
早退の生徒にまぶし春の川

☆　☆

季音花

春嵐　曲淵徹雄

猫車の逆立つ川瀬春寒し
春浅し目を閉ぢ触るる点字の「あ」
やはらかに尿(ゆばり)の音色二月尽
啓蟄の水平線を出る陽かな
物干しに踊る猿股春嵐

揺り椅子　笹本啓子

縁側に茶碗が二つ蓬餅
先生の大き掌にふれ卒園す
揺り椅子にありし日の夫春の闇
燃え尽きて潔く散る山椿
鳥の巣に膨らみ切つてゐる一樹

気まぐれな春　日髙道を

流氷や闇に魔物の聲のして
天気図は縦縞模様春疾風
春の夢いつの間にやら妻の顔
吟行は小雨決行惜春忌
清明や弥勒菩薩の指の先

春の沢　青木鶴城

解け出しの音に誘はれ山菫
せせらぎに何を映さむ春彼岸
足裏の砂の感触水ぬるむ
通り抜けの蹊(こみち)と信じ春時雨
魂のいくつ消えゆく名残雪

君の名は　保坂翔太

風花や花嫁衣装みぞかけに
「君の名は」と声を掛けたし寒牡丹
縄文の遺跡の矢倉冬夕焼
鳥たちが飛翔を競ふ春隣
吹つ切れて文殻燃やす浅き春

浮雲　檜鼻ことは

鳥雲に入りて老父の喉仏
クレソンのサラダとワイン君とぼく
土踏めばビオラの音色水温む
千切れゆく浮雲ひとつ涅槃西風
杉の花水占に吉の文字

青信号　野田静香

弁財天の撥動きさう水温む
御神籤の凶が再び四月馬鹿
確信犯の犬の眼と合ふ春の泥
清明や声の転がる土手遊び
囀や青信号と合唱す

馬酔木　熊倉千重子

気に入りの帽子攫ふな春疾風
馬酔木咲く筥に残りし母の文
初蝶に逢うて心が軽くなり
春の苑日の斑ゆらゆらカフェテラス
決断の少年ぐんと漕ぐ鞦韆

萌え立つ　河野はるみ

夜更けにも遅き朝にも雛の笑み
平均台の少女の手足風光る
遮断機の下でたんぽぽ通せんぼ
鉄柵の向かうは異国たんぽぽ野
先祖代代口伝の秘薬蓬萌ゆ

内視鏡　近藤徹平

春真昼異界まさぐる内視鏡
ウェディングケーキを頒ちげにうらら
ニュータウンと呼ばれし街やいぬふぐり
ちよび髭の考の肖像紀元節
引く白鳥や「異国の丘」の慰霊団

神の鈴　大塚茂子

初蝶来ままごと遊び俯瞰せり
二人静道行のごと茎立ちて
山独活に秩父味噌ぬり酒機嫌
朱の袱紗たたむ弥生の窓明り
たえまなく神の鈴鳴る弥生かな

初蝶　宮﨑チアキ

初蝶のたどたどしきを愛づるかな
菩薩様在すがごとく紅椿
寂寞とせせらぎの音白椿
春疾風もろに受くれば決心す
陽炎や故郷遠くなりにけり

春一歩　石田慶子

ガリバーのやうな靴来てたんぽぽ野
格子戸に透くる切絵のやうな春
受験生皆こころ持ち猫背かな
盛合せ白魚の目にせめらるる
ひとりには広きテーブル紙雛

あたたかし　石川理恵

交番に半旗三月十一日
うす紙を新しくして雛納
つちふるや朝より鴉騒がしく
文したためる春愁の友人へ
パン屋閉ぢパン屋開店あたたかし

花折断層　松島寛久

京へ向く花折断層や辛夷群れ
戦火の地球儀回し鳥帰る
深海の魚に届かぬ辛夷燃え
潮匂ふ漁師の血脈伊勢参
靴底に地熱這上る老の鍬

初蝶　原田秀子

初黄蝶先導にして渡り初め
初黄蝶ホースの飛沫躱しとぶ
庭石の間より産まるる初黄蝶
魚味始水引をつけ桜鯛
片減りの琴爪愛づる弥生かな

浅蜊飯　瀬戸雄二郎

一斉に浅蜊汐吹く一揆なり
木曾三川集まる所浅蜊飯
産地聞き浅蜊買ふのをためらへり
生国を問はれて浅蜊殻を閉づ
日が暮れて天秤重し浅蜊売り

花　葛城千世子

二十個の花器盛りあげて霞草
花会の朝の手直しフリージア
生け終へて急ぐ家路や春の月
花の陰ぐるりぐるりと春の鴨
清流へ折れて下がりし枝に花

春霞　飛永鼓

鉄塔の麓は在所春霞
山襞立つ若狭富士の春霞
春霞水面と白き三方五湖
つくし摘む園児しばらく円周に
収まりのつかぬ一枝藪椿

三月の大宮公園　下川光子

だしぬけに栗鼠の横切る木の芽道
木の芽風一所懸命杜の栗鼠
草青む追ひつ追はれつ縞の栗鼠
用水に沿ふ暮しなり初桜
桜咲く空想の旅吉野へと

春愁　中野彊

同じ木に紅と白ある椿かな
出勤のバスを花見のバスとして
春愁の尾をひいていく連絡船
花粉症苦しむ視界桃色に
梅散るや部屋の中にも二三片

物芽出づ　田中章嘉

年年に温暖早し桜かな
敷藁を省き出したる物芽出づ
日脚伸ぶサイクリングが土手の上
羽搏いてねだる子雀雨模様
ひたひたと春の眠りの満ちてきし

風光る街　後藤綾子

啓蟄や思はぬ人と出合ひたる
沈丁花思ひ出ひろふ日暮れ道
山姥の出さうな公園養花天
風光る銀座の奥のお稲荷さん
父と児の笑顔の会話風光る

逆さ富士　野平美紗子

春浅し湖面に揺るる逆さ富士
紅白の椿彩る狭庭かな
逆走の車の事故や春の宵
通る人皆誉めて行く紅椿
落椿朝の掃き寄せまた楽し

☆

☆

俳句
6月号予告
5月25日発売
予価950円(本体864円)⑩

特別作品　片山由美子・仁平勝・櫂未知子

大特集
季語　精神のアーカイブ
▼総論　実作のヒント「季語を響かせる」…名和未知男
▼各論　夏の季語の本意・本情
それぞれの実景―地域別歳時記にない季節の言葉
海外の季語事情
季語を通して現代的テーマ・社会の変化を詠む
季語をほぐして生かした秀句
季語のおもしろさ

第57回　蛇笏賞発表！　●受賞のことば　●選評　●自選50句抄　ほか

日本の俳人100　山西雅子句集『雨滴』

特別寄稿　『白泉句集』のなりたち……川名大

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」(https://bookwalker.jp/)など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

『水明誌』を繙く（水明三月号）

干場達矢（「トイ」編集発行人）

時刻表に捲れ疵あり春の卓　西山貴美子

かつて鉄道の時刻表は旅の計画を立てるときの必需品だった。あの分厚い本をめくりながら、何時何分発の特急に乗って、どこそこでローカル線に乗り換えて……と旅程を考える。ページを行ったり来たりしながら、ああでもないこうでもないと思案するのは心のたのしい時間だった。

だが調べるだけならほかに簡便な方法がある今は、時刻表はむしろ空想の旅をするのに用いるものかもしれない。自分の家の最寄り駅から、遠い地方の聞いたこともない名前の町に行ってみる。むろん在来線を乗り継いでとことこと。現実ではなかなかやらないスローな旅だ。

頭の中の旅なので、時刻表も最新号である必要はない。家に昔からある、捲れ疵のついた古いものでかまわないのである。いやむしろ、古いほうがいい。今は廃線になった路線なんかが載っていたら、かえって旅情を誘われる。

掲句はつまり旅情ということを伝えてくるのである。「春の卓」は適切な斡旋だろう。旅に誘われる季節というだけでなく、「疵」をやさしく肯っている。

終電車降り満天の冬の星　永野史代

終電に乗っている人はだいたい疲れた顔をしている。遅くまで仕事をしていた人はもちろん、飲み会帰りの人も酔いに混ざった疲労の色を濃くにじませているものだ。そして終電はだいたい混雑している。なにが悲しくてこんな時間まで外にいて、疲れた体を押し合っているかと、お互いがうとましい。終電には無残な空気が充満している。

以上は東京に暮らしている評者の観察である。

掲句の終電はそれとはちがって、地方の鉄道のことを書いているのだと思う。都市部でなければ終電もそれほど混雑していないだろう。座席にぽつりぽつりと人がいるだけかもしれない。日付が変わるような時間帯でもなく、酔っている人もいるだろうが、殺伐とした雰囲気はない。一日がつつがなく終わったという、むしろ安堵が車内にはある。

そんな終電車を降りて冬空を見上げたら満天に星がまたたいていた。星を見て「あすもがんばろう」と思うのは単純すぎるが、このシチュエーションならそんな気にもなりそうだ。未来への希望と祈りが外連なく詠まれ、一読胸に残る。

令和五年

水明賞

横山君夫
染谷風子
渋谷きいち

令和五年

季音賞

近藤徹平
大塚茂子

選考経過

山本鬼之介

◆水明賞◆

令和五年の水明賞は、令和五年三月十三日の水明賞選考委員会において受賞者を決定した。選考委員会では、先ず委員十名から受賞に対する総論を述べ、次に令和四年の水明集巻頭作家を候補者とし、各月の作品の出来栄えや順位、更に、十月号での夏季競詠の順位も審査対象として全委員が十分に意見を述べ討議を重ねた結果、上記の三氏に授賞することを決定した。受賞者各位は、今年七月号より季音「花」欄の作家として更に研鑽され、無鑑査同人として自己の個性をなお一層発揮した作品を発表されること期待する。

◆季音賞◆

令和五年の季音賞は、令和五年三月十三日の季音賞選考委員会において受賞者を決定した。選考委員会では、先ず委員六名から受賞に対する総論を述べ、次に令和四年の季音「花」欄で優秀な作品を発表した上位の作家を候補者とし、その作品について各委員が充分に意見を述べ合い討議を重ねた結果、上記の二氏に授賞することを決定した。受賞者は、今年七月号より季音「月」欄の作家として更に作品に磨きをかけられると共に、後輩の指導にも心配りされることを望む。

令和五年

かな女賞

島津初花

令和五年

新珠賞

霜多光代

小林京子

選考経過

山本鬼之介

◆かな女賞◆

令和五年のかな女賞について、三月二十四日に主宰より、永年に亘る優秀な作品発表に加えて若狭の俳句指導者として多大な功績のあった島津初花氏に授賞する意向を網野幹事長と大村編集長に伝えて同意を得、その旨を四月十日の常任運営幹事会において報告した。

◆新珠賞◆

令和五年の新珠賞は、令和五年三月二十四日の新珠賞選考委員会において、選考委員十名と各地区委員五名による選考結果を基に協議を重ね、上記の二氏の受賞を決定した。選考経過は左記のとおり。

第一次選考＝応募作品二十三編について、各委員が新珠賞に相応しいと判断した作品を五作品選出し、それぞれに三点・二点・一点の順に配点したものを新珠賞事務局に提出。

第二次選考＝一次選考の集計結果を基に、点数の上位の作品を中心に候補作品について選考委員が協議を重ねた結果、ほほゑみ・音楽会・心のふる里・返り花・盈虚、の五作品が最終候補に残った。

第三次選考＝二次選考で絞り込まれた五作品について更に協議を重ねた結果、「返り花」と「音楽会」の二作品の作者に受賞することを決定した。

令和五年

鼓笛賞

北山建治郎

令和五年

山紫賞

大塚茂子

準森和子

大村節代　　網野月を

◆鼓笛賞◆

令和五年の鼓笛賞は、令和五年の選考会にて、主宰と幹事長の三者協議の結果、北山建治郎氏の作品に、全員一致で決定となりました。

鼓笛集は、水明集会員皆様の研鑽の場です。水明集へ毎月五句投句して、三か月に一度位まわってくる鼓笛集への投句は大変と思いますが、編集部から依頼状が届いたら、欠かさずご投句をお願いします。鼓笛賞に繋がる道です。

また、鼓笛賞は一度受賞しても、次年度以降も受賞対象となります。

◆山紫賞◆

令和五年の山紫賞は、令和五年三月二十四日の選考会において、山本鬼之介主宰、大村節代編集長のご同意を経て決定した。受賞者は、巻頭一回を含む特選七回に選抜され、安定的に高位にありました。当該正賞受賞者は、山紫集への投句、また特選への選出は以後同様ですが、本年以降の山紫賞受賞選考対象者とはなりません。

水明賞

横山君夫

〈略歴〉昭和十五年富山県生。上尾市在住。平成十八年四月大宮読売俳句教室に入り俳句を学ぶ。平成十九年三月水明入会。平成二十九年同人。りんどう俳句会。

受賞のことば

この度は、「水明賞」という大きな賞を頂くこととなり、誠にありがとうございます。

偏に、りんどう俳句会でご指導頂いている山本鬼之介先生と句会の皆様のお蔭と、心より厚く御礼申し上げます。

退職後に、有り余る時間を「より楽しく」と思って始めた俳句ですが、いつしか十七年経ちました。これも先生方の励ましや句友との楽しい交わりがあってこそだと思います。

俳句は私の八十路のステージを楽しいものにして呉れています。俳句は心の栄養剤です。これからも年齢と仲良くしながら、末永く楽しみたいと念じております。

また、今回の受賞を私への励ましと心得、一句でも多く納得のゆく俳句を詠めるよう努めて参ります。皆様のご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、選考委員会の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

▼受賞対象句抄

樹齢いま二千余の冬芽かな

春浅し色付け前の土人形

父となる窓を開ければ初桜

囀や女子寮いまだ寝静まり

空五月太き棟木を揚げんとす

遠雷や遠くを見よと父の声

虹仰ぐ水禍の農夫手を合はせ

線路工夫どかどかと来て夜食かな

一切が霧遠ざかる櫂の音

掛け茶屋に女人の杖や冬紅葉

水明賞

染谷風子

〈略歴〉昭和二十二年埼玉県生。平成二十七年水明入会。平成三十年同人。令和二年新珠賞、令和四年鼓笛賞。りんどう俳句会、新樹の会、繭の会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度の水明賞受賞にあたり、山本鬼之介主宰を始め、網野月を先生及び水明の先輩諸氏、並びに共に研鑽を積ませて頂きましたりんどう俳句会、新樹の会及び繭の会の皆様に心より感謝申し上げます。

平成二十七年に、当時の大宮読売俳句教室に入会し俳句作りを始めました。私に俳句の面白さを教えてくれた動機は、令和二年十月に開催された、第四回水明塾における山本鬼之介主宰の「俳句における虚と実」と題する講話です。近松門左衛門に「芸は虚実皮膜の間」と言う言葉があります。主宰の「俳句における虚の必要性」と言う言葉はそれと重なるものがあると思います。今後も俳句の虚の世界を目指し、人間のいる俳句、自分の分身のいる俳句を目標に精進致したく思います。

主宰を始め、水明の先輩諸氏、句友の皆様、今後とも一層の御指導をお願い致します。

▼受賞対象句抄

春浅し前頭葉が武者震ひ

切腹は武士の心得初桜

浅草のはだか踊を荷風の忌

短夜やかつて御国に通ひ婚

文弱な人は嫌ひよ単帯

虹立ちてグリム童話を二つ三つ

音頭取る鳶の頭や夏座敷

霧の村忠治を慕ふ民いまも

仲人の粋な都々逸金屏風

冴ゆる灯や稽古帰りの吾妻橋

水明賞

渋谷きいち

〈略歴〉昭和十八年埼玉県生。平成二十六年水明入会。平成二十九年同人。平成三十年新珠賞。皐月の会。

受賞のことば

この度は水明賞まことに有難うございます。山本鬼之介主宰はじめ選考委員の皆様に心より感謝申し上げます。また皐月の会の句友の皆様にも合せて感謝申し上げます。

皐月の会は第一回の別所沼「初めての俳句教室」卒業の後に発足し、今年十年を迎えます。当初たった三人の句会でしたが、主宰自らのご指導を受ける幸運に恵まれ、私の独り善がりの稚拙な句も何んとか水明誌に名を連ねることが出来るようになりました。また今回は図らずも水明賞を受賞する運びとなり、まことに有難く、また感激もひとしおでございます。この感激を忘れず老骨に鞭打って頑張りますので主宰はじめ諸先輩方々の変らぬご指導を宜しくお願い致します。

▼受賞対象句抄

過疎村に男子誕生初霞

草萌ゆる父の墓より母よぶ声

紅梅や遅れて歩く妻を待つ

時刻表ひろげ撮り鉄春休

指切りの爪の半月春愁

草餅や厨の壁に火伏せ札

六月の空へ投げたるブーケトス

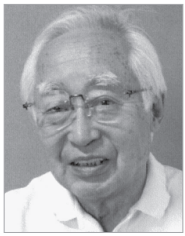
虹消えて明日は奥穂のジャンダルム

たこ焼に楊枝が二本西鶴忌

老ゆるとは快きこと山粧ふ

季音賞

近藤徹平



〈略歴〉昭和十一年奈良県生。平成二十五年水明句会入会。平成二十七年水明八十五周年俳句準賞。平成二十八年新珠賞。令和二年水明賞。水明熊谷句会。俳句の手ほどき。第一例会。

受賞のことば

三月十三日、山本鬼之介主宰から季音賞授賞の電話を頂きました。俳句に全く無縁であった私が俳句に精進するに至ったのは鬼之介主宰によるご指導の賜物と感謝しております。

私が喜寿の平成二十五年小中高の級友福田藤十郎君から熊谷句会設立の際に誘われて参加しました。自分の句に迷いが生じた頃句友の故加藤草太郎さんから水明通信添削講座を紹介され、講座担当の鬼之介副主宰（当時）に直接ご指導を頂きました。そのご指導の資料を今読み返し、内容の奥深さに改めて感じ入っています。鬼之介主宰には全くの門外漢だった私をここまで導いて頂きお礼申し上げます。今改めて振り返ると俳句に入門しなかったら、粗大ごみになっていたと思う昨今です。今後も追ってくる老いと私なりに付合いながら俳句を楽しみたいと思っています。

主宰をはじめ役員、同人、句友の皆様方、今後ともよろしくご指導の程お願いします。

▼受賞対象句抄

陶の牛納戸に戻る年の暮

逆縁を伝ふるスマホ寒燈下

風光る人影絶えし関ヶ原

藩校をしのび飛び石濃山吹

唐丸の往きし街道麦青し

呼鈴や門前にゐるひきがへる

「考える人」への応へ蟬時雨

雲海や水場を探す縦走路

枕木の間無邪気に秋の草

空澄むやジャンボ機を追ふ竹とんぼ

季音賞

大塚茂子

〈略歴〉昭和二十年埼玉県生。平成二十六年水明入会。二十九年同人。新珠賞。令和二年水明賞。水明熊谷句会。野ばらの会。櫻蔭句会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

東京の桜の開花が、例年よりも更に早いと伝えられている夜、鬼之介主宰より「茂子さん季音賞に決まりました。おめでとうございます。」とお電話をいただきました。俄には何の言葉も出てきませんでした。「ありがとうございます。」が精一杯でした。

熊谷句会は星野光二主宰から山中順子先生、そして鬼之介主宰へと御指導を頂いてきました。私は鬼之介主宰には、初期の頃添削指導を二年余りお世話になりました。下手な典型のような私の俳句をここまで育てて頂いてありがとうございました。

四季を感じ味わう心を忘れずに、生活の一部になっている俳句を、真っ直ぐな気持でこれからも詠んでゆきたいと思います。

これからも主宰はじめ諸先生方、編集の皆様、句友の皆様御指導よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

▼受賞対象句抄

春駒の楕円の瞳すがすがし

センサーライトうかれ猫らの邪魔をする

わらべらの散華や村の春祭

鳩を抱く少女の像や緑立つ

恋の日の波音今も桜貝

江戸小紋さらす水辺や南吹く

さるすべり武人埴輪のまろき肩

爽やかに踊る芸子の白虎隊

裏山の父の匿路や麦とろろ

木の葉雨鐘の余韻のうらおもて

かな女賞

島津初花

〈略歴〉昭和十五年福井県生。
昭和五十六年乙花会発足入会。昭和五十七年水明入会。昭和五十八年新珠賞　同人。
乙花会、若狭水明会、鳥羽谷俳句会、若狭町俳句会、現代俳句協会会員。

受賞に思う

春の彼岸の日に夫の十三回忌の法要をして居りました。この日はＷＢＣで日本がアメリカを破って優勝をした時、居間で親戚の客と家族が大歓声を上げて居りました。

その興奮の覚めない三日後の朝に主宰から電話をいただきました。「かな女賞に決りました。」そのお声に「ええっ……」とお礼の言葉も出なかった一瞬を今思い出しながら、この身に余る光栄を有り難く頂くことにしました。

この事を一番に報告したい人は、私を水明会へ導いて下さった故城子先生と若狭水明会の先人の方々。そして鳥羽谷句友の皆さんです。

二月に福井県で野の花文化賞を頂いたこともこれからの若狭水明会に大きな希望と発展の光を頂きました。これからもひたすら俳句の道を楽しみながら精進して行きたいと思っております。

最後になりましたが、主宰、編集長、水明句友の皆様、これからもご指導をよろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

鼓笛賞

北山建治郎

〈略歴〉昭和二十五年埼玉県川口市生。平成十七年水明入会、同二十一年同人。りそな俳句会。

▼受賞対象句

靄切りて駿馬疾風の今朝の冬
立冬の駿馬の蹄乾きたり
追切りの騎手は無色に今朝の冬

受賞のことば

この度は鼓笛賞を戴きありがとうございます。十八年間ただ続けて来ただけですが、りそな俳句会の皆様には感謝しております。故光二主宰教えの「命を活写せよ」、「季語をたたえよ」、「めでたくはなやかに」をモットーにこれからも精進してまいります。

山紫賞

大塚茂子

〈略歴〉昭和二十年埼玉県生。平成二十六年水明入会。二十九年同人。新珠賞。令和二年水明賞。水明熊谷句会、野ばらの会、櫻蔭句会。現代俳句協会会員。

▼受賞対象句

じやれ合ひて家族写真や千代の春
空あをければ梅一輪のなほ深し
饒舌な娘と聞き上手なる子亀ゐて
秋蚊寄る内緒ばなしが聞きたくて

受賞のことば

私と俳句との係りは、十年前の従兄弟の加藤草太郎さんからの電話でした。「今度熊谷に句会が出来るので、是非一緒に俳句を……」と熱心に誘われました。決心して参加すると雰囲気も良く、月に一度の句会が待ち遠しくなりました。でも草太郎さんは志ざし半ばで、俳句を愛しながら逝って終いました。その月命日三月二十四日に、網野月を様より山紫賞受賞の連絡を頂きました。感激で胸が一杯です。

選考委員の皆様ありがとうございました。

新珠賞

霜多光代

〈略歴〉昭和十二年群馬県生。
令和二年水明入会。皐月の会。

受賞のことば

この度は令和四年度新珠賞を受賞させて頂きまして誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。主宰からお電話を頂きました時はビックリして一瞬吾が事とは信じられませんでした。

令和二年秋、水明桜林句会に入会させて頂き椎野美代子先生から通信による御指導を賜りました。山田美佐尾様のお勧めにより令和四年秋、皐月の会に入会させて頂き主宰から直接の御指導を賜るという好運に恵まれました。水明入会以来、投句のみの参加でしたので句会で主宰、皐月の会の皆様に始めてお目にかかった時の対話の中から俳句の奥深さとことばの素晴らしさを学ばせて頂きました。微力ながらポエムの世界に値する美しいことばと心を求めて精進に努めてまいります。

主宰はじめ諸先生の皆様そして先輩の皆様御指導下さいましてありがとうございました。今後ともよろしくお願い申上げます。

▼受賞対象句

返り花

冬桜見詰むるほどに青く澄み
風に舞ふ御殿桜の岨の道
御仏の唇にひとひら紅さくら
朝日子にうるむ蕾や老樹の梅
海鼠壁土蔵の庭の梅真白
紅梅や野点の席のミス着物
浅紅の夢幻の一村桃咲けり
菜の花は平和の色や童うた
陽炎へる草のうつろひ童子仏
妹逝きて蒼きを沈め冬薔薇
さらさらと帯解くる音寒牡丹
寒椿かなしさ裏むほど深紅
補陀落の風の香ふふむ返り花
あはあはと一輪の光ゲ返り花
湘南の浜辺のオフや黄水仙

新珠賞

小林京子

〈略歴〉昭和二十九年埼玉県生。令和三年水明入会。令和四年同人。第一例会、若松例会、繭の会。現代俳句協会会員。

受賞のことば

三月の土曜日の朝、主宰より「新珠賞受賞のお電話を頂きました。身に余る光栄に震えを覚えた後、徐々に喜びが込み上げてまいりました。

山本鬼之介主宰、網野月を先生のご指導の賜物と心より御礼申し上げます。また、「はじめての俳句教室」以来お世話になっております青木鶴城様はじめ諸先輩、句友の皆様の励ましが支えとなり継続することができ、深く感謝致します。

応募句は、上野の東京文化会館を主な舞台とし、音楽会を前に華やぐ心から、音楽会が終わり高揚した心の余韻に浸るまでの様子や気持を折折に詠んでみました。

この受賞を励みとして、俳句を「詠む」「読む」「鑑賞する」力を更に養い、遅々とした歩みでも高みを目指してまいる所存です。今後とも皆様のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。最後になりましたが選考委員の皆様ありがとうございました。

▼受賞対象句

音楽会

秋澄めり糊の効きたるドレスシャツ
夜会草ドレスの裾の軽きかな
色鳥や慎み深き遠会釈
咳一つ聞こえ満場指揮者待つ
薔薇の芽やプログラムにはブラームス
花冷の邸に弦楽四重奏
長身のボーイソプラノヒヤシンス
炎昼や変奏曲は超絶技巧
大股で歩く素足にピンヒール
香水瓶の空となり終楽章
羅を召し撫で肩の匂立つ
幕間のスタンドバーに秋扇
チェリストの吸ふ息深し秋思かな
上野にも八ヶ岳にも同じ秋
シャンパンの気泡の行方冬銀河

新珠賞を心の糧に

選考委員長　山本鬼之介

今年は昨年の二十編を上回る二十三編の応募があり、更に、昨年と同様に俳句歴の浅い新人の方々が多く応募して下さったことと、それに加えて高齢の会員の応募があったことも大変嬉しいことです。

数年前から新人の多い句会を中心に、新珠賞への応募を積極的に呼びかけてきた効果が定着してきた証と思われますので、今後もこうした地道な努力を、句会の指導者・幹事・先輩諸氏に続けていただくことをお願いする次第です。

さて、今年の選考結果は既報の通りですが、誤字・脱字・送り仮名・旧仮名遣いなど、基本的な誤りが今もって解消されていません。選考委員長として、今後応募する方々に是非心掛けてほしいことをお伝えします。

①文字は一字一字心を込めて丁寧に書く。＝癖字に注意。
②誤字・脱字を皆無にする。＝辞書で充分確認。
③送り仮名や旧仮名遣いを正しく表記する。＝辞書で確認。
④作品と同様に題名が大事。＝作品十五句の雰囲気に相応しい題名を熟考すること。

霜多光代［返り花］

作品は全体的に無難な作風で、一句一句の独立性もあり、大方が安心して読める作品なのであろうが、見方を変えれば、細波ばかりでは物足りないと思った委員がいたことも事実である。筆者としても、中波程度の作品を容れてめりはりを付けた方がよかったと思っている。句の並べ方と題名の安易さに不満があるが、心に残った句を記して受賞の祝意を述べる。

冬桜見詰むるほどに青く澄み
風に舞ふ御殿桜の岨の道
紅梅や野点の席のミス着物
寒椿かなしさ裏むほど深紅
湘南の浜辺のオフや黄水仙

小林京子［音楽会］

秋から始まって翌年の冬で終わる句の配列が、作者の日常の断片を繋ぎ合わせた一つの物語を形成している。そして、その媒体が「音楽会」という題名即ちテーマである。作品十五句をテーマが柔らかく繋ぎ止めている。テーマは、着脱が容易な特殊な接着剤のように思える。何と言っても、作品を包括する題名が、受賞を引き寄せるのに大きく貢献した。

秋澄めり糊の効きたるドレスシャツ
花冷の邸に弦楽四重奏
羅を召し撫で肩の匂立つ
幕間のスタンドバーに秋扇

チェリストの吸ふ息深し秋思かな
作者と句の中の人物の躍動感が感じられる。

◆第三次選考で受賞にならなかった三作品についての寸評。

[佐々木史女［ほほゑみ］]
作品の全体像から判断して、作者が高齢者であることが委員の共通認識であったと思うが、心を打つ作品が散見された。
転た寝の夢の楽しき春炬燵
控へ目な女の庭に鉄線花
秋の夜や胸に住みつく懐古癖

[畠中八重子［心のふる里］]
農村風景を覗かせた地方色が、程よく委員の心に届いた作品で、第一次選考の点数もそこそこであった。
春光に築百年の駅舎かな
ペダル漕ぐ一直線の青田道
岩肌を埋めつくしてや草紅葉

[皆川更穂［盈虚］]
第一次選考で候補とした委員は三割であったが、その全員が最高の三点を付けた作品で、これまでに無かった例である。句作の力み過ぎがブレーキになったのではなかろうか。
古木より星をしるべに蘗ゆる
大欅揺するビートや秋のジャズ
満月や決して見せぬ裏の貌

◆次に第一次選考と第二次選考に残らなかった作品の中からそれぞれ一句を選び、来年の応募を待ち望む筆者の気持の証としたい。

古都の庭骨の髄まで身に入むる　新井孝麿
葉脈をあらはにしたる今朝の霜　石関六弦
梅の里擦り寄る犬と山に入る　秋谷風舎
梅雨晴間砂防に赤の忘れ傘　清水桂子
吾のやうな心のありし雪達磨　吉川拓真
先斗町を語るマダムや夏の雨　菅原真理
行きは一人帰りはうふふ夏祭　川島夕峰
倭歌飛鳥寺へと曼珠沙華　糸井しるく
細き道辿れば出会ふ山桜　吉川十三子
鳥帰る車の免許今日かぎり　落合和枝
巡礼の杖にやさしき春の土　菅原卓郎
集ふこと諦むる日の鰯雲　岡田芳春
土筆摘む指が故郷恋しがる　篠﨑紀子
富士山を隠し通すか春霞　鈴木敦子
長持唄絶えて久しく桐の花　松村登美江
儚さを秘めて日暮の酔芙蓉　綿貫ひさの
深き礼涙に霞む雪景色　杉浦理恵
夕さりの白きうなじや風の盆　綿引まりこ

選評

網野月を

今年の応募作品は二十三作品が揃った。各十五句には、真摯に作句されたものが多くみられ、楽しい句も散見されて全体的に好印象であった。掲題においてはもう一工夫欲しいものも見受けられた。

各地区委員を含むと十五名の選考委員の第一回目の投票によって「ほほゑみ」「音楽会」「心のふる里」「返り花」「盈虚」の五作品が選考の対象となった。

その中で受賞作の二作品は、十五句の構成は元より、推敲を重ねた句、句意のオリジナリティーの際立った句、叙情を前面に押し出した句などがあって、掲題にもマッチした作品となっていた。受賞作品の中から秀逸と筆者が考える句と惜しくも受賞は逃がしましたが、コメントをさせて頂きたい句を揚げて鑑賞します。

菜の花は平和の色や童うた　霜多光代
陽炎へる草のうつろひ童子仏
寒椿かなしさ裏むほど深紅

掲題は「返り花」だが、桜に限らず広く素材は取り上げている。第一句は現代的なテーマのようにも思う。「わらべ唄」の方が良いでしょうか。第二句は一見平凡な句作りであるが、実は平易に詠めむほど難しいものはないのである。推敲を重ねた結果であろう。第三句は秀句である。作者の今後の俳句人生を示しているような御句だろうと考える。

色鳥や慎み深き遠会釈　小林京子
咳一つ聞え満場指揮者待つ
羅を召し撫で肩の匂立つ

掲題「音楽会」の齣ごまのシーンを活写して十五句を揃えている。第一句は楚々とした夜会の雰囲気を季語「色鳥」に託して成功した。第二句は十五句中筆者が最も注目した句である。季語「咳」の新たな本意を模索する意欲が感じられる。第三句は視覚的な情報を「匂立つ」と嗅覚的な修飾をした点に新味を覚える。

長持唄絶えて久しく桐の花　松村登美江
弱虫の兄の前行く蛍狩
晩年の父の風貌冬の蜂

掲題は「初恋」である。第一句、第二句の叙情性は秀逸であり、いずれも座五に季語を配置していて、季語の力を十二分に引き出している。

のどかさや骨董市に子連れ客　綿貫ひさの
形代を納めて鈴の緒の軽き
小気味好い客あしらひの熊手市

掲題は「此処等の四季」であるが、「此処等」は如何なものかと考える。折角の佳句が活きていません。素材も広角で、といって散漫さは微塵もありません。句が佳いだけに題にも一工夫の推敲をお願いしたいです。題によって句を再考する切っ掛けになるかと考えられるのである。

おめでとう

大村節代

昨年は新珠賞応募の二十作品という盛況に喜びました。ところが今年はそれを上廻る二十三作品もの応募があって、本当に激戦でした。

選考委員の皆様も私も下読みをすませ、推薦する作品を胸に選考会に臨みました。そして今までになかった激論の末、「返り花」と「音楽会」の二作品に全員一致で決定しました。その後、名前が発表されました。霜多光代、小林京子のお二方には本当におめでとうございます。

今年の応募作品は題名も適切で、誤字もなく、良く纏まっている作品の数々に感心しました。

○霜多光代「返り花」

冬桜見詰むるほどに青く澄み
風に舞ふ御殿桜の岨の道
御仏の唇にひとひら紅さくら
菜の花は平和の色や童うた
補陀落の風の香ふふむ返り花

大上段に構える事なく、おだやかな句の数々、その静かな景に、ゆっくり流れる時に魅かれました。

○小林京子「音楽会」

秋澄めり糊の効きたるドレスシャツ
薔薇の芽やプログラムにはブラームス
大股で歩く素足にピンヒール
幕間のスタンドバーに秋扇
シャンパンの気泡の行方冬銀河

作者が音楽が好きで、音楽会の楽しさを満喫している様が句を通して読手に伝わり、いつの間にか読手まで音楽会に誘われて音楽が聞こえて来る心地になります。

受賞作品以外にも、力作が数多ありました。惜しくも受賞には到りませんでしたが、来年も是非とも挑戦して頂きたいと思います。

○篠﨑紀子「野の仏」

花満ちて空の青さを丸抱へ
着ぶくれし誰が着せたか野の仏

一句目、情景が脳裏に浮び、全句に流れるやさしい表現の底に流れる深い心に共感しました。

○鈴木敦子「春色」

透き通る夜明けの空や春寒し
春色に染まる屋上展望台

春色という捕え処のない題に、一瞬とまどいました。しかし句を読み進めると、空気間が伝わり春色を理解しました。

○杉浦理恵「言寿」

親の責果たす幸せ雪国へ
深き礼涙に霞む雪景色

子息の結婚予定の相手方へのご挨拶でしょうか。切ないまでの親心が伝わります。よかったですね。

大いなる期待

青木鶴城

先ず今年度の新珠賞を受賞された霜多光代、小林京子のご両人に心よりお祝い申し上げたい。

審査の対象となった二十三作品は、其々工夫を凝らして練り上げられ、其々のオリジナリティーを感じさせる作品であった。特にご高齢の方からの応募もあり、その挑戦意欲には頭の下がる熱い思いを感じた。

「返り花」　霜多光代

浅紅の夢幻の一村桃咲けり
菜の花は平和の色や童うた
さらさらと帯解くる音寒牡丹

桜、梅、桃、菜の花、草、冬薔薇、寒牡丹、椿、返り花、黄水仙と花が歌い込まれた作品。掲句の一句目は山梨の桃源郷を想起させる。「夢幻の一村」が素晴らしいイメージを駆り立て、上五、中七から「桃咲けり」で完結させた。

二句目は、座五の「童うた」で平和の色を収めたのが成功している。三句目、寒牡丹が帯を解く仕種に緊張感と季節感を最高にした。掲句以外の句も一句一句の評価が高いものであったが、返り花の句が二句続いた事と、「返り花」の題名に関してはもう一考の必要があったか。

「音楽会」　小林京子

色鳥や慎み深き遠会釈
咳一つ聞こえ満場指揮者待つ
大股で歩く素足にピンヒール

音楽会へ出かけるドレスシャツ選びから始まり、音楽会の余韻を感じつつディナーを楽しむ様子を四季折々の感情や景を交え一五句に収めた作品である。一句目、着飾った観客同士のハイソなイメージを抱かせる。二句目、開演前の一瞬の静寂に奏者と聴衆の緊張感が伺える。三句目、ソロのバイオリニストであろうか、舞台を大股で歩くピンヒールが目に浮かぶ。夫々音楽会ならでの景と作者の期待感が的確な言葉で描かれている。

残念ながら受賞は逃がしたものの、特に印象に残った作品と句を下記に紹介する。

「古都の風景」　菅原真理

あくがれてここで生きをり蓮の花
めぐる山滴りて時ゆるやかに

古都京都の景が上手に詠まれ、作者の古都への思いが十分伝わる作品であった。

炎天や大き背中に隠れし子　川島夕峰
福鍋やなんでも言へる趣味仲間　〃
天狼は寿命の中に生きてゐる　吉川拓真
吾のやうな心のありし雪達磨　〃

冒頭にも記した通り、応募作品の評価は拮抗していて全員にチャンスを感じるものである。是非是非来年も沢山の挑戦を期待したい。

珠を磨く　石山かつ子

桜の蕾も日々にふくれ始めた三月二十四日今年度の新珠賞応募作品二十三篇が揃った。それぞれ十五句の中の思いや、本気の作品に襟を正し何度もくり返して読ませていただいた。その中で、新鮮な句。まとまっている句。叙情のある句等活発な意見の交換が行われた。そして最後に満場一致で、霜多光代、小林京子氏が見事に受賞された。心よりお祝を申し上げる。

○霜多光代「返り花」

冬桜見詰むるほどに青く澄み
御仏の唇にひとひら紅さくら
朝日子にうるむ蕾や老樹の梅
海鼠壁土蔵の庭の梅真白
あはあはと一輪の光ゲ返り花

十五句の中の一句一句の完成度が高い。しっかりとした眼で取り組んでおり、作者の感性で日常の中を自在に対象をとらえて倦きさせずに読ませていただいた。字もていねいで整っている。

○小林京子「音楽会」

秋澄めり糊の効いたるドレスシャツ
色鳥や慎しみ深き遠会釈
咳一つ聞こえ満場指揮者待つ
大股で歩く素足にピンヒール
シャンパンの気泡の行方冬銀河

作品の中からコンサートの音楽が聞こえてくるよう。読み手も一緒に連れて行ってもらっているようにとっても雰囲気がよい。指揮を待っている静かさのときの咳一つよく表わしている。季語の並べ方を工夫すればもっとよくなったかも。

下馬札を過ぎて参道梅見坂　菅原卓郎
草摘むや図鑑持参のあにいもと

行動力旺盛な作者の写生句、二句目は子供を見守っているやさしさが出ている。

集ふこと諦める日の鰯雲　岡田芳春
手を洗ふ見えぬ汚れに水冷たし

コロナ禍の一年を十五句に纏めあげた。この頃は何も出来ず諦めることが多かった。近ごろようやくにコロナ宣言も外れてマスクも所によっては取れるようになった。

初めての香水パリの風の中　綿引まり子

まだ荒作りながら、それぞれの個性が垣間見えてこれからが楽しみ。今回は受賞を逃したが来年も期待したい。

光満つ　石井喜恵

桜は散ってしまったものの、三年間に及ぶマスク着用が個人の判断に任せられる事となり、少し明るい気分になってきた。今年の新珠賞は昨年にも増して多くの応募作品があり、喜ばしい限りです。奇を衒わず、気持の伝わる句をと思い選考させて頂いた。見事受賞された霜多光代、小林京子の御二方には心よりのお祝いを申し上げます。

返り花　霜多光代

冬桜見詰むるほどに青く澄み
御仏の唇にひとひら紅さくら
浅紅の夢幻の一村桃咲けり
菜の花は平和の色や童うた
陽炎へる草のうつろひ童子仏

十五句に出てくる花々は、冬桜、梅、菜の花、薔薇、牡丹、椿、黄水仙、実に多くの種類に及ぶ。そして一句一句が独立して品格良く詠まれている。明るく華やかで読み手の心にすんなり入ってくる。初句の冬桜の句、冬桜はそれほどびっしりとは花が付かない。見上げていると空の青さと一体になってしまう。とても清々しい気分になった。

音楽会　小林京子

咳一つ聞こえ満場指揮者待つ
長身のボーイソプラノヒヤシンス
炎昼や変奏曲は超絶技巧
大股で歩く素足のピンヒール
幕間のスタンドバーに秋扇

作者の趣味の一つにジャズ、ボーカル担当と聞く。ここではクラシックの音楽会に絞り十五句を詠み、心地良い臨場感を読む者に与える。開幕前の静まり返った雰囲気を「咳一つ」で見事に表出する。幕間のスタンドバー、素足のピンヒールで聴衆の人々の人物像が活写されている。超絶技巧のバイオリンは「炎昼」でなくてはならない。季語の斡旋の妙。次回に期待する心に残った作品を。

落合和枝

鳥帰る車の免許今日かぎり
鯛焼の重み分け合ふ嫁姑

筆者も昨年末に免許証を返納したばかり。作者の空虚感を共に味わった。鯛焼を分け合う嫁姑、何と微笑ましいこと。

畠中八重子

下萌やブナの隙間にぬくる風
新茶摘む手にやはらかき里の風

各々違う場所で詠んだ風に薫りを感じた二句。

皆川更穂

歳時記を捲り五感の更衣
月に棲み地球の盈虚観る兎

五感の更衣と云う新しい視点に俳味を思う。盈虚という意欲的な題材に挑んだ作者の意気を肯いたい。

人生百年時代に

井口俊晴

新珠賞を受賞された霜多光代、小林京子の二氏にお祝いを申し上げます。今年は去年を上回る二十三作品が集まる超難関でした。水明俳句会で登竜門と言われ、また、新人賞のように思われている新珠賞ですが、今年はびっくりするほど年配の方からの応募もありました。人生百年時代に俳句を楽しもうという人が増えているからでしょう。

一方で「新珠賞にはどのような作品が相応しいのか」ということを、選考会の過程で改めて考えさせられました。例えば、初々しくて成長が期待されることか、それとも、個性が強く人を惹きつけることか、難しい問題です。ただ、全ての原稿がきれいで誤字・脱字が無かったことは嬉しい限りでした。

まず、霜多光代さんの「返り花」から。

冬桜見詰むるほどに青く澄み
御仏の唇にひとひら紅さくら
海鼠壁土蔵の庭の梅真白
補陀落の風の香ふふむ返り花

穏やかな時間が過ぎていくように、十五句がリズムよく流れています。青、紅、白、桃色、黄、緑と視覚的に次々楽しませてくれるのも魅力です。

次は小林京子さんの「音楽会」です。

秋澄めり糊の効きたるドレスシャツ
大股で歩く素足にピンヒール
幕間のスタンドバーに秋扇
シャンパンの気泡の行方冬銀河

さっそうと音楽会に出かけ、張り切っている作者の様子がよく出ています。全篇おしゃれで明るい感じが持ち味だと思いました。

このほか、惜しくも入選を逸したものの、楽しい作品がいくつもありました。例えば石関六弦さんの「フォーカスリング」。「羽立ててすこし間のあり兜虫」は、愛用のカメラを手に、今まさに飛び立とうとしている瞬間、シャッターチャンスを狙って、兜虫にフォーカス（焦点）を合わせる緊張が伝わってきます。

また、新井孝麿さんの「京都スケッチ」は、コロナ禍もあって、しばらく京都に行っていない筆者には羨ましい限りの句がずらり。「大原の里のこの道狸住む」なんか、「えっ、ほんと？」と思うと同時に、笑いがこみ上げてきた。

こうした句作の楽しさを忘れず、来年もぜひ挑戦をしていただきたい。

前途洋洋　日高道を

令和五年度の新珠賞の選考が終わりました。

今年は二十三名の応募がありました。

新珠賞は水明の他の結社賞と違い、応募作品一五句の絶対評価で受賞が決定されます。その為にはまずは応募しなくては始まりません。

今回見事に受賞された霜多光代、小林京子のお二方には心よりお祝い申しあげます。

また今回は残念ながら受賞に至らなかった皆さんも、また挑戦を躊躇っている方も、是非来年を目指して頂きたいと思います。

「返り花」　霜多光代

四季折々の身近な木々や草花を、作者独特の、正確で鋭い写生の力で見事に一五句を詠み上げられました。

風に舞ふ御殿桜の岨の道
海鼠壁土蔵の庭の梅真白
菜の花は平和の色や童うた
さらさらと帯解くる音寒牡丹
補陀落の風の香ふふむ返り花

等の句は、色彩、音、香り等を上手に叙景して良句となっています。

今後さらに精進されることを期待しております。

「音楽会」　小林京子

十五句を通じて作者の音楽に対する愛情、様々な音楽会での経験等が散りばめられ、一緒に音楽会に居るような気持になる作品です。

色鳥や慎み深き遠会釈
咳一つ聞こえ満場指揮者待つ
幕間のスタンドバーに秋扇
上野にも八ヶ岳にも同じ秋
シャンパンの気泡の行方冬銀河

等の作品は、臨場感たっぷりの良句です。

作者は短期間で「華の一句」に二度選出される程の実力の持ち主、さらに磨きを掛けて、更なる高みを目指して頂きたいと思います。

今回受賞に至らなかったものの、「盈虚」皆川更穂さんと「生きてゐる」吉川拓真さんの作品は共に斬新かつ独創的で挑戦意欲に富んだ作品だと評価したいと思います。

その他の印象に残った句から

「春泥や畔確かむ爺の脚」　糸井しるく
「酔客の眠りは深く春流る」　吉田十三子

是非来年も継続して挑戦していただきたいと思います。

皆さんの挑戦の力、水明は「前途洋洋」です。

道を開く

保坂翔太

水明の「登竜門」である新珠賞に二十三名の方々が挑戦された。上位五名の選考まではスムーズに進んだが、その中から誰を推すかの話し合いに相当のエネルギーを費やした。その結果、霜多光代、小林京子の両氏が見事に受賞された。賞を射止められた方々に心よりお祝い申し上げたい。

◇返り花　霜多光代

冬桜見詰むるほどに青く澄み
朝日子にうるむ蕾や老樹の梅
妹逝くきて蒼きを沈め冬薔薇
寒椿かなしさ裏むほど深紅
補陀落の風の香ふふむ返り花

しっかりした句作りと、きれいな文字に好感が持てた。題名「返り花」は、十五句を植物、特に季節ごとの花を読んでいるので違和感はない。しかし、カタカナの使い方に、気になる句があった。

◇音楽会　小林京子

秋澄めり糊の効きたるドレスシャツ
咳一つ聞こえ満場指揮者待つ
大股で歩く素足にピンヒール
幕間のスタンドバーに秋扇
上野にも八ヶ岳にも同じ秋

題名「音楽会」の作品は、十五句を通して音楽会の様子が手に取るように感じることができた。ただ、作品の順番が春夏秋冬になっていないこと、報告調の作品があること等が気になった。推敲を重ねることによる飛躍を期待する。

惜しくも受賞をのがした三人の作家の句を取り上げる。まずは、皆川更穂氏の「盈虚」と題した作品。句に硬さがあり、評価がわかれた。スケールの大きさは魅力。

満月や決して見せぬ裏の貌
月に棲み地球の盈虚観る兎

次に畠中八重子氏の「心のふる里」と題した作品。題名を反映した繊細で懐かしさのある句作りが魅力。

踏み跡の無き山頂や冬景色
夜叉ヶ池水面に落つる数珠子かな

さらに、「ほほゑみ」と題した佐々木史女氏の作品。句柄から、かなりの年配者であることが分かる。情の深い作家であることも想像できる。

生かされて卒寿の春を迎へたり
転た寝の夢の楽しき春炬燵

最後に、もう一人の作家を取り上げる。「生きてゐる」と題した吉川拓真氏の作品。青年時代の葛藤に共感。

一切は「空」か神社の落葉踏む

新雪を踏んで歩いた道を振り返ると、己の足跡がくっきりと見える。新珠賞に応募された作家の方々は、俳句の道にしっかりと己の道をつけたのである。自分にしかない道を開いたのである。今後も俳句の道を邁進して欲しい。

羽ばたく明日

曲淵徹雄

新珠賞を受賞された霜多光代、小林京子の両氏に心からお祝い申し上げます。そして、令和五年　新珠賞に十五句の意欲作で挑戦された二十三名の各氏に大きな拍手を送りたいと思います。

本賞の選考に際しては、選考委員がそれぞれの推薦する作品について意見を交わし、いろいろな角度から検討しつつ、最終的に受賞の二作品に決定された。

「返り花」　霜多光代

冬桜見詰むるほどに青く澄み
風に舞ふ御殿桜の岨の道
菜の花は平和の色や童うた
さらさらと帯解くる音寒牡丹
寒椿かなしさ裏むほど深紅

対象と向きあって感じることを、作者・光代さんの言葉にして一句にまとめている。選考対象の十五句では色（視覚）、音（聴覚）、香（嗅覚）など感覚を用いて表現することにより句に臨場感が生まれ、読み手の共感を呼び起こしてくれる。

「音楽会」　小林京子

秋澄めり糊の効きたるドレスシャツ
色鳥や慎み深き遠会釈
大股で歩く素足にピンヒール
花冷の邸に弦楽四重奏
シャンパンの気泡の行方冬銀河

先ず、一つのテーマ「音楽会」で十五句をそろえようとする意志に感心した。作者・京子さんは音楽が好きで、音楽会によく足を運ばれ、ご自分でも演奏したり唄ったりされる方だろうと想像する。十五句の中には音楽に疎い筆者にすっと読みとれない句もあったが、それぞれの句にある服装、作曲者、演奏者、曲目、楽器などに作者の気持が秘められているのであろう。今後、さらに題材を広げて多くの佳作を発表されるものと期待します。

今回は残念ながら受賞されなかったが、来年こそはと挑戦していただきたい方の作品。

梅の里擦り寄る犬と山に入る　秋谷風舎
山躑躅面もふらずトラバース　〃

山行を楽しむ風舎さんのおおらかな人柄が、情景を丁寧に詠んだ句から伝わってくる。

梅雨晴間茶房に赤の忘れ傘　清水桂子
女子会へ少しおめかし菊日和　〃

一句目の「赤の忘れ傘」と二句目の「少しおめかし」に、それぞれ梅雨晴間と菊日和の日にこの句を詠んだ桂子さんの心もちが込められている。

推薦委員寸評より

○大橋廸代

返り花

たしかな写生眼できっぱりと詠む個性的な句に脱帽。海鼠壁、土蔵の庭の梅真白、さらさらと帯解くる音、寒牡丹、補陀落の風の香ふふむ返り花。

音楽会

色鳥や慎み深き遠会釈――咳一つ聞こえ満場指揮者待つ、シャンパンの気泡の行方冬銀河

○椎野美代子

返り花

色彩と抒情の描に成功。意味不鮮明もあり、惜しい。

音楽会

音楽会へ誘う。映像鮮明な表現力。臨場感横溢。

○永野史代

返り花

菜の花は平和の色や童うた

補陀落の風の香ふふむ返り花

全体によくまとまった句です

音楽会

夜会草！夜顔をよく使い音楽会に行ってひきこまれてしまいそうなよさが出ていました。

○茂木和子

返り花

言葉の斡旋に少し無理がある様に思いますが、これからを楽しみにしています。

音楽会

題名通り音楽の世界を読み手を通して私達に伝わってくる。専門的な言葉もあるがあまりそれを感じさせない。

新珠賞秀句選

網野月を

新珠賞応募作品から秀句、ならびに筆者の感銘を受けた句を鑑賞する。並びは作品の到着順である。

干柿のふたつを残し藪の家　石関六弦

葉脈をあらはにしたる今朝の霜

木守柿ではないらしい。軒下の地味な色合いが目に浮かぶようである。次句は、「あらはにし」た原因が座五の「今朝の霜」にあるという構成であるが、「葉脈をあらはにした」景は何とも自然界の無常を表現するに余りある。

梅の里擦り寄る犬と山に入る　秋谷風舎

秋の暮踏み跡消ゆる修験道

前句の犬の様態の活写が上五の季語「梅の里」に微妙に響き合っているようだ。次句の「修験道」と題「里山小景」の関係性に少々戸惑いを感じるのだが、実景なのであろう。一句だけにして読むと季語「秋の暮」の本意にチャレンジしていることが分かる。

さくら満開青くとも黒くとも　佐々木史女

控へ目な女の庭に鉄線花

前句の「青くとも黒くとも」は読み手の鑑賞に幅があるであろう。筆者は桜花のスペクトラムを想像した。次句は「控へ目な女」の秘めた心根を吐露するようなことになっている。

戦死者に語る口無し冬凪沁む　吉川拓真

冬灯ビルの大きくなりにけり

前句の反戦精神に敬意を表したい。座五の季語「冬凪」が効いている。次句の「大きく」は物理的な事柄ではなく、存在感の事であろう。座五の「なりにけり」の丁寧な表現にも重みを感じる。

先斗町を語るマダムや夏の雨　菅原真理

あくがれてここで生きをり蓮の花

京都の観光シーズンは秋であり春である。そして新年であろうか。夏には祇園祭や川床のような名物はあるのだが、他の季節には及ばないだろう。そんな中での「夏の雨」であって、彼の地に住み暮らす人の様態がよく表現されている。次句の「あくがれて」は本来の語彙を大切にしている。

福鍋や何でも言へる趣味仲間　川島夕峰

上五の季語「福鍋」は「福沸し」ともいって、新年の季語である。若水を沸かすことであったり、神へ供える餅入りの粥を煮たりすることにも言うことがある。掲句の「福鍋」はもう少し賑やかな、仲間内の鍋ごとのようであり、「趣味仲間」の打ち解けた様子が思い浮かぶ。作者ご自身がそうした仲間を集める求心力があるのであろう。

黄ばみたる書のグラシンや寒の内　糸井しるく

大枯野伎楽面力士の熱気

「黄ばみたる書のグラシン」であるから古書なのである。かつての岩波文庫などはグラシン紙が巻かれていたものである。座五の「寒の内」の効果が絶大である。次句は、秀句である。中七座五への句跨りのリズムは緊張感を生み出すことに成功しているし、上五の季語「大枯野」の荒涼とした皮膚感覚が見事に中七座五へ繋がっている。

車椅子去りて桜の散り急ぐ　吉田十三子

桜散る中を車椅子が通り過ぎ去って行くのである。その景を作者の心眼から見ると恰も「車椅子」が通り過ぎるのを待っていたかのように「桜の散り急ぐ」様を見ることになったというのである。句中に作者が存在しているというのは例えばこのような句を言うのである。

巡礼の杖にやさしき春の土　菅原卓郎

「杖」は杖だけを表現していると解しても良いだろうし、杖に象徴した巡礼の歩みと解してもよいだろう。「春の土」の特性を「杖にやさしき」ものである、と言い切った作者の思い切りの良さがひかる。俳句での断定は難しい場合があるのだが、掲句はしてのけている。

屋上に浮かび息吸ふ吾は金魚　岡田芳春

沈黙の春瀬戸際のサピエンス

前句は、水面にまで金魚が浮かび上がって息を吸っていると解しても良いのだが、「吾」自身が金魚のように「屋上に浮かび」のぼって深呼吸している、と解してもよいだろう。心の中が酸欠状態なのかも知れない。次句は「沈黙の春」という同名のレイチェル・カーソンの書籍を思い浮かべた。「サピエンス（＝知恵）」が行き詰まってしまった現代への警鐘句なのである。

着ぶくれし誰が着せたか野の仏　篠﨑紀子

諧謔の効いた句になっているようだ。が、この仏さまは信仰を集めているのであろう。その証左に「着ぶくれし」という結果を目の当たりにしている。諧謔の中に、信仰という人間の誠を描き出していて、暖かな心持にさせてくれる句である。

摘草やリヤカーに乗る二人の子　鈴木敦子

作者は常から幼い者たちへの慈しみの眼差しを持つ句をリリースしている。掲句も同様であって、上五の季語「摘草」の柔らか味と「リヤカーに乗る二人の子」と取り合わせという単純な構成になっているのだが、その単純さへ昇華することの並々ならぬ推敲の過程が想像できる。

神の留守ますます深き埴輪の目
磨き上ぐシンクを照らす冬の月　綿引まり子

前句の季語の斡旋は絶妙である。刳り貫かれた目の底知れぬ深さに原始的な自然信仰さえも呼び起こしているような感覚が蘇る。次句は身辺の事々を詠んでいるようである。「冬の月」の照らすシンクの反照の鈍さが、逆に「冬の月」の本意を担保している。

新　珠　賞（結果報告）

○受賞作品

返り花　霜多光代

音楽会　小林京子

○予選通過作品（到着順）

京都スケッチ　新井孝麿

フォーカスリング　石関六弦

里山小景　秋谷風舎

四季折々　清水桂子

ほほゑみ　佐々木史女

生きてゐる　吉川拓真

古都の風景　菅原真理

ふれあひ　川島夕峰

畦の春　糸井しるく

桜　吉田十三子

兄弟　落合和枝

心のふる里　畠中八重子

初遍路　菅原卓郎

沈黙の春―2020―　岡田芳春

野の仏　篠崎紀子

春色　鈴木敦子

初恋　松村登美江

此処等の四季　綿貫ひさの

言寿　杉浦理恵

盈虚　皆川更穂

カフェテラス　綿引まり子

新季音同人（昇欄者）

○新季音「雪」欄
鳥羽和風　森本早苗

○新季音「月」欄
近藤徹平　大塚茂子
熊倉千重子

○新季音「花」欄
横山君夫　染谷風子
渋谷きいち　鈴木玲子
髙橋満耶子　野村美子

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2023年6月号

特集 それぞれの雨 ～四季折々の名句
○総論～雨の季語の多彩さ 伊藤幹哲
○それぞれの雨 句セレクション
春…河内静魚　夏…成田一子
秋…高柳克弘　冬…今井肖子
○俳人たちの雨の句
原雅子 上野一孝 瀬間陽子 塩見恵介

〈グラビア〉俳句界NOW 神田ししとう

特別作品21句 松浦加古

特集 私の「俳号」の由来 ～こめられた思い
天野小石 大石雄鬼 甲斐遊糸
中川雅雪 波切虹洋 名和未知男
西川火尖 蟇目良雨 堀田季何
マブソン青眼 山田真砂年 横澤放川

※セレクション結社 「青穂」小山貴子

私の一冊 三輪初子「わわわ」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
柳広司（小説家）

「俳句界」投稿欄 一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

現代俳句鑑賞

網野月を

マネキンを抱へて春とすれ違ふ　堀田季何

（『俳句四季』3月号・骨骼より）

作者は、句誌「楽園」の主宰である。新しい形態の結社を模索している。ビジネスモデルの創造と創作活動のリベラリズムと言っても良いかも知れない。掲句は作者の句の中では極めて解し易い句である。それだけに深読みの出来る句でもある。

どの馬もまづ山を見る牧開　仲寒蟬

（『俳句四季』3月号・そして牧開より）

作者は、二〇二〇年に句誌「牧」を創刊した。句誌「港」を継承するものである。景と概念、概念と景の両立性の中に句の成立があるように思う。句誌「牧」を紹介しながらの「牧開」の連句の題は、秀逸である。

鮨食うて割勘の夜の男女かな　津髙里永子

（『俳句四季』3月号・秘め事より）

作者は、三年前に句誌「墨BOKU」を立ち上げた。心の落ち着きと微妙な揺れを表現することに巧みな作家である。もちろん即物として描き出している。作者の句は安易な表現に陥らずに、描いて見せてくれているのだ。他に「秘め事の花びら餅となりにけり」がある。

冬野より帰りて日記書かざる日　千場達矢

（『俳句四季』3月号・をんなことばより）

作者は、新句誌「トイ」を率いている。精鋭揃いの五人誌であり、「トイ」は今後の注目株なのである。句は必然からも勿論、理屈からも解放されている。他に「蝌蚪の蝌蚪なるつかのまを嘉すべし」がある。

くるぶしの見えて厚着の子なりけり　中西夕紀

（『俳壇』3月号・雪女郎より）

こういう子がいたように思う。綿入れか何ぞを着重ねて、妙に厚着なのである。それでも足元は無防備と言っても良いくらいで、「くるぶし」が見えている。今どきの時流ではファッションなのであるが、かつての風俗の中に景を思い浮かべてみた。座五の「子なりけり」が時代性を惹起している。他に「肩凝ると思へばそこに雪女郎」がある。

焼きたてのパンをミモザの窓辺にて　長嶺千晶

（『俳壇』3月号・窓辺にてより）

実に洒落た句である。「ミモザ」は窓の向うの庭木であろうか、それとも切り花として飾っているのであろうか。筆者は庭木であろうと想像する。「焼きたてのパン」もまた良い香りのするものだからである。他に「隠沼の鷺点景に寒明くる」がある。

探梅の海は見えねど遠からず　麻里伊

（『俳壇』3月号・光りの水より）

座五の「遠からず」は、時間的ではなくて空間的な把握であろう。梅の香を頼りにして嗅覚に神経を集中していたら、はからずも潮風を感じ取ったのではあるまいか。筆者は海に近い古都を思い浮かべた。他に「うすらひの光りの水となつてゐる」がある。

埋火の火種はいまも都鳥　和田照海

（『俳壇』3月号・都鳥より）

座五の「都鳥」という季語だけで、古からの和歌や歌謡、もしくは物語世界を惹起させるものがある。加えて上五の季語「埋火」とあれば囲炉裏端か何かに語り部が登場してくるのかも知れない。この句の場合、寒冷な地方を想像するので、「埋火」は季節を跨いでいて、「都鳥」が句の季語ということになるだろう。他に「さざなみの国と応へて都鳥」がある。

鷗にも春意のごときもの浮かぶ　松王かをり

（『俳壇』3月号・かもめより）

上五に「鷗にも」と言いながら、作者の底意にある、鷗だからこそ、というような自然に対する畏怖を読み取ってしまう。人間の精神世界は実は人間だけのものではないのだ、と宣言しているようだ。他に「雪解川体をほどきて海原へ」がある。

脳から中指までの冬銀河
死魚の眼に反神論の灯を移す
屈葬がいいな敗北の膝を抱き　高岡修

（句集『蝶瞰図』より）

はじめの句は人体内のいわばミクロコスモスと大宇宙のマクロコスモスを組み合わせた構成になっている。俳句特有の時空間の収斂と拡散を遺憾なく発揮した構成になっている。現代詩の世界でも活躍する作者ならではの構成（＝構え）の句作りである。組み合わせからすれば、中の句は死生観と宗教観の組み合わせと言って良いだろう。魚類のような大脳皮質の弱小な動物と人間が敬虔と哲学との迷走の末にたどり着くであろう「反神論」との組み合わせ、この句の場合は融合である。そして第三句の意は、「屈葬」の形態への作者の解釈である。「屈葬」の本当の意味は推論の域にあって、解明されていないと言って良いだろうが、作者は「敗北」の形態であると結論付けている。そして「敗北」な人間の本来の結末であり、自らもその結果を甘受すると遺言しているのだ。無季俳句における季語以上の無常観を演出することに成功している。

俳誌望見

梅澤佐江

「好日」　令和五年一月号　通巻八五〇号
主宰　高橋健文　発行所　千葉県松戸市

昭和二七年四月、阿部筲人が千葉で創刊。師系道部臥牛。自由な発想と自分の言葉でそれぞれの精神風景を構築する。

（月刊）

高橋健文（主宰）「次の波」一〇句より

オスプレイ飛ぶなコスモスが逃げる
結局は一つが基本木の実落つ
鳥渡る塗り替へらるる世界地図

一句目、オスプレイは米国軍の最新鋭輸送機で水平飛行、垂直離陸、空中停止が出来る。オスプレイの離着陸であえかに揺れるコスモスは、宛ら逃げ惑う人々の様、戦仕様のものは飛んで欲しくないという切実なる思い。二句目、無辜の民の命を奪う戦争は勝っても負けても同じ位悲惨である。基本は一つ、地球上から戦を無くし和平と恒久の平和、これに尽きる。三句目、秋になり北国から日本に渡って来る鳥、北国でシベリアを想起する。ロシアによるウクライナ侵攻という国連憲章を踏み躙る暴挙、クリミア併合に端を発し止まる所を知らず、世界地図をも塗り替えるのかと怒りが顕となる。

いてふ散り始む微糖のヨーグルト
くわりんの実僧のお辞儀は手を合はす

四句目、ティータイムに微糖のヨーグルトを召し上がっている。カーテンの開け放たれた窓の外に目を遣ると、日差しの中を金色に輝きながら銀杏の葉が舞っている。銀杏の葉で作られる糖分と微糖ヨーグルトとの取合せの妙味。五句目、榠樝の実は芳醇な香りが特徴で、古くから薬用として用いられている。

純鉢僧にシロップ漬を施したのであろうか。僧は手を合わせるお辞儀をした。右手は神聖、左手は不浄とされ、合一したところに人間の真実の姿があるとされ、尊敬と感謝の気持を表したのである。

また次の波打ち寄する翁の忌

芭蕉の言葉で「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」は、私意を捨てて物事の本質を見て、対象を一体化する事に風雅の真があると。寄せ来る波の彼方の「俳句の本質的な深処」に少しずつ近づきたいと願う真摯な作者の姿が見える。

翠雲集（同人）七名　各七句より

藁草履吊す万屋冬うらら　内田庵茂
掻巻といふ懐かしき一夜かな　小原澄江
湯豆腐や話し相手の欲しき夜　向山ちか子

白雲集（同人）主宰選　三三名　各五句より

時雨るるやゆつくり溶ける角砂糖　梶間淳子
鰯雲友に逢ひたし語りたし　片岡伊つ美
間合よきジャズのドラムや文化の日　髙田秀雄

晴雲集（同人）主宰選　三〇名　各五句より

高めたき心の免疫きのこ汁　久保内八千代
小鳥来る旧病院のレストラン　小原幸子
鍋割山鍋焼食ひにのぼりけり　重城弥生

好日集（同人及び会員）主宰選　八八名　各六句より

木の実降れ降れ人生の八合目　菱川瑞枝
三度目も痩せ秋刀魚にて終りけり　越野雄治

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　篠崎紀子

愚痴多し網で目刺しを焼きながら
網棚に忘れし帽子春陽浴ぶ
浅はかなヒト科となりし紀元節
錠剤を数ふるひまな建国日
春寒やワッフル両手予定なし

森下山菜

詩神来る二月渚を臑濡らし
壺焼ほじる昼会席の初対面
牡丹雪知らぬ女と傘の中
海眠る哀しき町のしらすぼし
妻は四人ナザレの浜の干鱈売り

さいたま　菅原真理

今朝の雨ひそと艶めく白椿
春浅し空は浅葱になりぬれど
薔薇の芽に雨柔らかき門出かな
薔薇の芽の紅ほぐれ少女めく
冴返る山の峰峰天を突く

新　暦文

列車待つまつ毛に溶くる春の雪
建国日出雲大社の日章旗
手の平に願ひ叶はぬ春の雪
紀元節叔父の遺品のハーモニカ
網打てば光る公魚真珠色

梅澤輝翠

雁風呂を焚く流木に潮の香
水温み差したる紅は試供品
薔薇の芽や膨らむ日々に君を待つ
門衛の青き制服入社式
門札に代々の名や春の月

熊谷越田栄子

妙薬や夫の指南の玉子酒
玉子酒まろき女の謀
前掛けにくるむ摘草匂ひ立つ
四囲の山遅遅と暮れゆく里朧
神楽殿しやりんと巫女の鈴朧

早春の朝ひとしきり波の音
早春の足音始まる小庭かな
私生活話したがらぬ官女雛
春菊や一椀みたす薬の香
中学生体育座りで春の中

川口　新井のり子

唐草の切妻破風や針供養
料峭や竹あをあをと奥嵯峨野
春寒し迷惑さうな犬の靴
のど飴に泡透けをるや春の雪
辛夷咲く循環バスに客ひとり

さいたま　池田珪子

贈られし椿の苗の今大樹
妖精の光の乱舞風花よ
観梅や「月の桂」に逢ひにまた
独り寝の先先思ふ春の宵
春愁ふ宛先違ひ戻る文

清水桂子

春泥を避けて着地の滑り台
薄氷やはかなき恋のごと消ゆる
淋しげに廻る寺内の風車
土間奥の漆喰蔵や春寒し
初花や背筋気にして闊歩する

岡田宣子

冴返る柔道場の青畳
梅が香や玉石交じる陶器市
春寒やクロックムッシューカフェにて
笹舟のレガッタ春の空の下
水仙のスロープ海へ迫りけり

さいたま　反町　修

春寒やカッター立つる波しぶき
早春の無人販売籠二つ
春めくや今は暗渠の散歩道
初午や煙草燻す露天商
曇りなくシンク磨くや春浅し

元田亮一

風花の空へと一機誘導路
風花をうけて見上ぐる二年坂
酒二合酌みて軒端の梅見かな
品書に野暮は言ふまい梅見茶屋
天空の城に雲なし寒夕焼

伊奈　菅原卓郎

澄める眼の若き役者よ風光る
袖に触れ揺らぐ大社の赤椿
ファインダー越しにたゆたふ春の波
水仙の首たをやかにしなふ庭
仏前にバレンタインの生チョコを

平塚　丸屋詠子

風花やけぶるビル街遠灯り
奥山の風がうたふや早春賦
里山は薄紅色に春早し
春の野に先ゆく猫を見失ふ
にはとりが生き生き闊歩春の庭

さいたま　山岸久美子

跳ね起きる枝に目覚めぬ山の春
あかときの湖わたる風冴返る
いばらの芽に夢を託せし下校の子
手作りの蕗味噌並ぶ道の駅
蕗味噌に浮かぶ安曇野国訛

西幅公子

宮廷へ憧れ遥か金槐忌
春の雪貴き人の滅びゆく
春霞沖の白帆を滲ませり
楽しげに首の鈴振る仔馬かな
試験場へと向かふ十五に春の雪

小林京子

風花の舞ひて明るむ谷間かな
実万両鳥の運びし贈り物
玉眼の仁王ちらりと落椿
愛犬に行き先を告げ春コート
梅見頃寺の布袋の見え隠れ

越谷　阿部幸代

冠雪のあれが立山冬夕焼
何あらむ一羽鳴きたる鴨の陣
道着より湯気立ちのぼる寒稽古
早春の漆黒の畝均しけり
平然と車道横切る春の猫

上尾　横山君夫

地獄網佃漁師の白魚漁
三脚を立て家族写真の建国日
春泥や塾に忘れし破れ傘
網かけて掬ひたくなる春の星
接吻に消えて無くなる春の雪

さいたま　渋谷きいち

「今日はこのまま帰らないで」と春の夢
良薬も劇薬もあり春の夜
恋文はＢ５一枚花こぶし
リラ冷や港の沖を駆逐艦
遠山は弥陀の寝姿寒茜

染谷風子

思ひきり柏手を打つ建国祭
日の丸を揚ぐる区役所建国日
春寒や孫の首筋細すぎる
調神社石のうさぎに春の雪
紀元節祈り厳か門跡寺

新井孝麿

煮凝の琥珀の夢の溶け初めし
北風や素足粉を吹く女学生
呆けたる畑の野菜や春浅し
老犬の散歩をせがむ余寒かな
春寒や閼伽棚なべて土埃

さいたま　本橋稀香

追儺寺思ひ思ひに絵馬跳ぬる
百歳を生き抜く母に春近し
四辻へそつと豆置く節分夜
大股の女一人の遍路寺
春浅し北に消えゆく淡き虹

伊予　向井章子

病む友に贈る気合の寒卵
赤城から姉の文かな吹越来
真先に手を上ぐる顔入学児
男ながむる黒門のうめ雨催ひ
観梅や序でに覗く陶器市

さいたま　飯田忠男

真砂女偲べば薔薇の芽太き生家かな
落椿あれば絵となる煉瓦道
春浅し真砂女の宿を訪ふ旅路
早咲きの安房の菜の花仏前に
皇居を巡り大手門へと春うらら

森下美智枝

愛受けて風花のなか二人旅
閉ざされし旧家の門や春の雨
先人の智恵知る春の歴史館
蕗味噌や硫黄の匂ふ山の宿
観劇や月冴返る帰り道

さいたま　野村美子

春寒し老舗旅館の佇まひ
伝説の姥捨山や春寒し
下宿屋の三畳一間春の夢
立春や決意新たに歩む道
春寒し指三本で面洗ふ

千坂平通

襟元を合はせ出でゆく鎮花祭
劇場の裏町通り夜半の春
読み掛けの直木賞本二月尽
襟元の真珠の光卒業歌
片付けしイルミネーション二月尽

村杉清吉

天狼の無音の光木立射る
シリウスに赤きワインのグラス上げ
天狼やポケットの手の仄温し
曇天に何をささやく冬桜
宝くじの儚い夢や冬桜

後記朝香

枝先のふくらみ見えて雪解光
雪解けや始動いちにの三輪車
雪解雫跳ねて光に散らばりぬ
春炬燵先客の猫跳び出せり
春炬燵「レム睡眠」へ落ちゆけり

さいたま　森　和子

ジャムの蓋なかなか開かぬ冬の朝
リハビリを終へたるあとの根深汁
遠山の風姿どんより春隣る
春来るエンジンふかす耕運機
登校を見守る旗や黄水仙

加藤でん治

ふはふはと傘に降りしく春の雪
春寒や高速道路の軋む音
大空に手を合はせをり建国日
黄昏や小鳥捕ふる霞網
春寒や寂する妹の白き耳

霜多光代

玉砂利の響き吸ひ込む初明り
曙光舞ふ吊裏白の淡きあを
隣人をうからと思ふ紀元節
唄ひつつ絞る鯛網靭の浦
短命を知らずけなげや春の雪

皆川更穂

湯豆腐を食めば和らぐ肩の凝り
湯豆腐や話もつきて火も弱む
下萌や雨を待ちゐる庭の木木
菩提寺の七七日忌からつ風
咲き初めし寒梅に会ふ墓参り

杉戸　佐々木史女

歳を重ね好味と思ふ蕗味噌よ
蕗味噌をふるさと納税返礼に
目秤で選ぶ大根道の駅
納骨までの預りし舎利冴返る
前線が空真二つに分け冴返る

さいたま　竹澤和子

子の寄らぬ着ぐるみのゐる浅き春
老人の二人のベンチ木の芽時
佐保姫の腰掛けたるや苔の岩
夜の空と同じ眼の猫の恋
淡雪を溶かす煙草の煙かな

吉川拓真

幼子の苦心して接ぐ雪達磨
春時雨パンの匂ひに誘はれて
積ん読を一気に断捨離春時雨
接待に若さ貰ひし春夕焼
ふと我に戻りしニュース冴返る

山戸美子

湾一望する霊峰の淑気かな
寒卵ひとつをそつと味噌汁へ
相伴に与る夫のバレンタイン
余寒なほ温もり残るビーフシチュー
早春の光の中を母出棺

川崎　鈴木玲子

瓦礫より響く産声冬の空
避難所のテントを濡らす春の雨
淡島や四万本の針供養
待望の二段ベッドや遅き春
分身のシルバーカーと梅の里

和歌山　髙橋満耶子

時雨るるや街の灯滲む昇降機
身売りせし工場の窓に春の雪
耳朶の透きて春めく阿弥陀仏
流し目で差し掛くる傘春の雨
参道を杖こつこつと日脚伸ぶ

さいたま　綿引まりこ

ばらの芽や学舎めぐりするひと日
心なごむや春の墓参の花手水
波を憂ふる太公望や冴返る
行列に真知子巻きして冴返る
菊嫌ひの叔母の墓前に春の供花

小川洋子

冬夕焼富士の陰影拝みけり
鴨群るる懐深き多々良沼
道急ぐ馬橇の鈴や遠ざかる
冬ざれや往時栄えし映画館
罅の愛しき天平菩薩冬うらら

春日部　諏訪サヨ子

機影抱き冬夕焼の「うみほたる」
梅東風や九十九折ゆく峠道
外国機飛び交ふ羽田春近し
魚釣る好天の湖凍解くる
春の風邪旅行案内横に置き

仲田利子

春日野に琵琶の余韻や寒茜
祖国での戦を知らぬ鴨泳ぐ
関越道ゲレンデ目指しひた走る
未来への扉は重し受験生
雪解水やがて大河へ迸る

草加　外村紀子

春めくや羽根倉橋へ迫る富士
春めくや旧家にならぶ鬼瓦
春立つや葉かげ明るき築地塀
春立つや控室より響くチェロ
アルペジオの低音のなか卒業す

さいたま　石関六弦

凍豆腐北国の陽に卓ぬくむ
しがらみも乾きからから凍豆腐
みちのくの旅のおはりに凍豆腐
春寒し夢への路を遠まはり
薄氷の溶け始むるを鳥走る

吉川　杉浦理恵

鶯の初鳴きを聞く良き日かな
百均の夫婦箸なり春を待つ
この雛は姉のおさがり姉ごのみ
雪合戦手加減無しと孫と爺
八方睨みの夫の遺影や鬼は外

和歌山　嶋田洋子

生卵白身は嫌ひ春浅し
もう一品胡麻和へにして春菊を
友急逝思考停止となる早春
早春のゼブラゾーンを渡る鹿
春菊は主役に近し鍋煮ゆる

川口　木村小麦

湯畑の浮きて見ゆるや里朧
諳んじて摘草五種を小さき手に
川音を近くに岩湯朧かな
草摘むや背に甲斐駒蒸溜所
いちどきに並ぶ摘草道の駅

東京　飯室夏江

仰臥する吾の鼓動やつくづくし
ものの芽や地球僅かに膨みて
坊守の秘伝涅槃の団子かな
春光や「坊主ですは」と太公望
賑やかや学校田に蝌蚪生る

若狭　松村登美江

酌み交はす女三代小正月
持ち寄りの煮物誉め合ふ女正月
春炬燵開けつぱなしの四畳半
積ん読の数増すばかり春炬燵
風花を帽子に乗せて娘来る

さいたま　湯浅　和

春の泥軍の一年膠着す
春泥や畦確かむる爺の足
恐山ときをり回る風車
遠き日やおんぶの稚に風車
初午は郷土料理よしもつかれ

糸井しるく

アスファルト裂け目あらはに春時雨
陽炎に憂へ異国の大地震
冬ざれの続く道にも産毛かな
来し方の湯屋の煙突姫椿
膏薬に祖母の面影冴え返る

大阪　飯塚智恵子

旅心梅の便りが熱海から
バレンタインチョコの届きぬ春進む
近頃は夜勤となりぬ猫の恋
片栗の花に貰ふは堪へ性
秘書嬢の微かな匂ひ爪化粧

さいたま　鈴木藻好

縫糸の絡み苛立つ寒き春
霜焼けに厚き軟膏就寝時
妖精の花かたくりに願ひ事
無人家の金網越しに蕗の花
天ぷらの食の文化や蕗の薹

武田重子

水仙花風にふるへてゐたりけり
寒明や空は真青に澄み渡り
寒明や心わづかに弾み出す
蒼天や梅の香りの甘きこと
むせかへる程の香りや梅の園

高原和子

托鉢の笠に出会ひぬ雨水なり
せせらぎのわづかに聞こゆ雨水かな
紅梅も白梅もあり美術館
小江戸てふ古き町並梅匂ふ
小雨降る畑仕事や鴨帰る

山下ユリ子

膝落とし知る暗香や沈丁花
艶やかな葉に乗る手毬沈丁花
名香やうつろひ告ぐる沈丁花
恋猫やいつもの場所はひつそりと
春の猫横目で追へばさくら猫

さいたま　小田美智

軒下に相寄る雀雪催
「リュウグウ」の陸の凸凹冬銀河
肩車誰より高く出初式
オムレツのふはりと焼くる建国日
寒卵割りてわりない仲となり

森美枝子

ヒヤシンスにほふ窓辺のミルクティ
あをぞらのキャンバス飾る花辛夷
春の雪天の女神の吐息なり
春の海沖の鷗もうきうきと
如月や身を切る風に襟を立て

石浜悦子

伊勢詣で終へて安堵の建国日
端座して今日の一日を建国日
春寒や膝の疼きがちりちりと
春寒や隣の「空」はジャンプせり
耕せし土ぬくぬくと高笑ひ

鳴海順子

走る子に祖父の手づくり風車
風車剣豪のごと感知せり
風車どんな色目が生まるるや
春の泥替へ歌歌ふ子三人
春一番真白き富士のどつしりと

春浅し沖行く船の大漁旗
春雪や解けず残りしもの多き
花辛夷あか児とともに育ちけり
日を浴びてさらなる白へ花辛夷
より添ひて木立潤す春の雨

新しきパン屋へ急ぐ春立つ日
小気味好きお嬢吉三や厄払
風車止まりし後の色模様
妹の手編みセーター旅の空
春寒しムンクの絵から声聞こゆ

擦り切れしモノクロ映画春の星
見上ぐれば涙堪ふる春の星
留め難き燃ゆる想ひや草萌ゆる
下萌やここよりそこは緑濃し
植込みの端に間借りの草燃ゆる

さいたま　小駒さち子

摘草や帽子に入るまでと決め
草摘むや「待て」もほどほど犬飽きる
摘草のかき揚げほのと癖のあり
土手下り初初しき蓬摘む
公園を横切る猫や夕朧

川島夕峰

梅一輪花びらうすくうすみどり
悴みて軍手先まで指入らず
かじかめる園児の両手保母つつむ
悴む手下着のボタン途中まで
歩のおそき我に合はせて春の月

綿貫ひさの

街音をひたすらに吸ふ春の雪
里山の札所のとどめ花辛夷
伊賀者の「弥七」を思ふ風車
かざぐるま今や風車の発電機
春泥もひとときやがて母離れ

東京　山中いちい

風車をザックに挿せし男ゐて
七つ八つ奥社の茶屋に風車
春泥に吸はれし古希の物思ひ
園庭に競ふ靴跡春の泥
春泥や引力少し強くなる

さいたま　緒方みき子

染矢峯雄

秋谷風舎

横山礼子

光濃し砂浴びをする雀の子
今年またいつもの道の藪椿
碧眼の家族睦みて梅見かな
逝きし人の声を聞きたし入り彼岸
戦禍の地赤きぶらんこ揺れてをり

さいたま　小山あつ子

数分を居眠りしたし春炬燵
春蘭や笑みを誘ひて院の庭
節分や夫の声響き豆の数
モーニング順番待ちの二月かな
大根をもらひて散歩二人連れ

和歌山　南條きわゑ

声奮ふ女性コーラス水仙花
道の端の雪被りをる水仙花
覚えなききつい仕打ちや春の風邪
能書きをせせら笑ふか春の風邪
空澄みてひかり冷たき梅二月

東　京　柳父はる

バレンタインチョコを渡すは保健室
節の豆年齢端数のみを食ぶ
節分や息子の作る恵方巻
バレンタイン義理チョコ作る小学生
茅葺きの屋根にはらはら紅き梅

畑宮栄子

寒明けや娘の代筆で投句せり
啓蟄や眼鏡補聴器杖必需
庭先の蕗の薹摘み朝の粥
寒中の庭に顔出す蕗の薹
あれこれと思ふばかりや冬薔薇

藤　沢　小島喜代子

浅春や一枚の絵を描き始む
春風に乗り同窓会のメールが来
カルメンの真紅の衣裳落椿
賤が屋なれど三樹絢爛玉椿
川岸の夕陽幼と野蒜摘む

宮　代　関谷多美子

雪解けにわあわあ駆けだす山辺の子
雪解風頬の突つ張りマッサージ
春炬燵睡眠さそふ夢ごこち
春炬燵足がえにしや俺お前
雪解けてロボット膳にお辞儀せり

さいたま　落合和枝

幼子へはりきる爺の鬼やらひ
膝の上はなれぬ犬の春の風邪
春寒し形見の藍の上着出す
一歳や初めて見たる春の雪
ローラー付トラクターもて麦を踏む

鬼石　榊原聰子

返答に詰まり水洟拭ふ振り
梅林に仕上ぐる途中朝日影
早春のまことちひさき遊具揺る
フックするゴルフボールの追ふ芝火

大阪　遠藤人美

凍てゆるむ孫の大賞喜びぬ
孫の賞を写真の妻へ春浅し
車椅子湯舟から見る春の月
春の月歩道の白き帰り道

さいたま　川村　治

春泥やかつて僕らの秘密基地
北の果て硫黄の匂ふ風車
一つだけ回らぬ寺の風車
たそがれて歩をゆるめ春の月

樋口元美

耕人の声豊作の予兆あり
朝東風に故郷山河のかをりあり
耕を忘れし畑になみだ雨
荒東風や帰る生徒と押し問答

草加　持永喜夫

恋猫や自然の摂理感じ入る
どの国の猫も同じよ恋猫よ
夕暮れのトランペットや沈丁花
沈丁や畑の中の通学路

さいたま　鈴木敦子

白魚を握る板長手に年輪
白魚の目と目が合ひて止まる箸
嫁ぎゆく娘の肩に春の雪
草原に尾を振る駿馬春の雪

北出久美子

雨上り出番いまかと蕗の薹
きさらぎの風にとまどふ子猫かな
オープンの行列続く二月の日
蕗味噌のほのかに香る今朝の膳

鬼石　加藤ナヲ子

息を飲む茜の空や東風つよし
耕の土の息吹きや黒々と
五年ぶり飾りし雛のものがたり
由比ヶ浜しらす旨しや東風吹けり

さいたま　鈴木香音子

墨の香や思ひを込むる初硯
八幡宮初鳩達と連れ立ちて
手編せし耳掛あてて子のはしやぐ
餅花やシャラシャラシャラリ風になり

奥山粉雪

野放図に辛夷の大樹天を衝く
辛夷の芽七日あまりを綿帽子
北国を指す道標に春の雪
沖遠く蛤さらふ波頭

篠原さよ子

香り来て花開くを知る探梅行
道祖神に笑み誘はるる探梅行
駆け下る駅伝日和風光る
夏祭きみに恋して終りたる
雲の峰海辺の町はありありと
老犬とひとひの孤独虎が雨

寺町知子

所沢　関根千恵

作品評

山本鬼之介

浅はかなヒト科となりし紀元節　篠﨑紀子

「ヒト科」という言葉について、生物学の本を繙くといろいろと難しいことが書かれているが、素人が簡単に理解するには、広辞苑のヒト科の説明［哺乳類サル目（霊長類）の分類群の一つで、オランウータン（別科とすることもある）・ゴリラ・チンパンジー・ヒトの四属からなる］が適当だろう。

建国記念日の二月十一日に、たまたま作者が自分自身呆れるような失敗を為出かしたのであろうか。常日頃の自信を失った結果がヒト科という言葉になったような気がするが、俳句の内容が創作であったなら失礼な句評になってしまう。建国記念日の日は嘗ての紀元節であり、神武天皇から更に更に遡り、人類の起源であるホモーサピエンスに至る悠久の思いが籠められているようにも思えてくる。

海眠る哀しき町のしらすぼし　森下山菜

季語の白子干は、鰯の稚魚をさっと茹でて塩干しにしたものであるが、鰯のほかに鯵や白魚などの稚魚が混じることもあり、乾燥してくると縮緬のように縮れるので、双方の状態を取り入れてちりめんじゃこ（じゃこ＝雑魚）とも呼称する。

さて掲句を一読して、内海に面した特徴のない小さな漁港の町の様子が伝わってくる。先ず上五の「海眠る」は、大きな波の無い内海の様子を示していると解釈するのが妥当であろう。次の中七「哀しき町」に作者の思いが籠められていると思う。白子が干されている沿岸の景色や、活気のない町全体の印象と共に、この町の中で醸成されている人間模様をも描出していると解した。疲れ顔のママが居るスナックバーの片隅で、白子を肴に酒を飲んでいる男。まさに演歌の世界であり、女の恨み節が聞こえてくるようだ。

春浅し空は浅葱になりぬれど　菅原真理

日本の色見本の中の浅葱色で、薄い藍色である。朝起きて今日のお出掛けを楽しみにしていたが、生憎の曇り空で、気分が乗らなかった。だが、昼近くになって空が浅葱色に変わり、早春の陽射しが注いできた。しかし、もう一つ気持が高揚せず、どうしようかと迷っている様子が、助動詞已然形の「ぬれど」によって実に上手く表されている。

列車待つまつ毛に溶くる春の雪　新　暦文

春の粉雪が舞うプラットホームで列車の到着を待つ一女性。すらりとした身の洒落た春コートとショルダーバッグがなかなか様になっている。顔に飛び込んでくる雪に目をしばたたく様子が映画のヒロインを思わせる。もしもこの光景を作者が見ていたとしたら、ついふらふらとこの列車に同乗してしまったかも知れない。

門衛の青き制服入社式　梅澤輝翠

大手メーカーの工場で行われる新入社員の入社式を思わせる俳句である。工場の正門にある守衛室にライトブルーの制服を着用した守衛が数人居て職務を果たしている。やや緊張して門を入る新入社員をてきぱきと案内している守衛に、新人たちの気持が安らぎ、守衛が着用している清々しい制服に、その会社に対する信頼度を高めている。

玉子酒まろき女の謀　越田栄子

「まろき女」とは、夫に対して不平不満を言わず、愚痴もこぼさず、常に夫を立てて家庭を守る妻のことであろうか。もしもこのような女性が居たら国宝級のひとである。作者はそれほどまでゆかぬとも、かなり家庭的なひとだと見ている。少し具合の悪い夫のために、心を込めて玉子酒を作っている作者は、ブランド物のバッグをねだろうと先日来密かに作戦を練ってきた。ついに今日の玉子酒が決め手になるだろう。

私生活話したがらぬ官女雛　新井のり子

むかし御所に勤めていた官女のプライバシーを、雛壇に飾られた三人官女に投影して詠んだ句であるが、あの柔和で清らかな官女に話しかけ、人が寝静まった後のぶっちゃけ話を聞いてみたくなる。作者も同じ気持を抱いたのかも知れないが、なかなか口の堅い官女なのである。

春寒し迷惑さうな犬の靴　池田珪子

華麗な服を着せられた小型犬の散歩姿を街中で見掛けることがあるが、犬はどのような気持なのだろう。服ならまだ我慢の仕様もあるだろうが、靴まで履かされたのではたまったものではない。軽快な歩行が阻害され、困り顔の犬の様子が想像できる。

観梅や「月の桂」に逢ひにまた　清水桂子

辞書を引くと、「月の桂」についての説明があり、秋の季語「月」の傍題でもあるが、本句のそれは、神代植物園のうめ園にある梅の銘木の名である。説明によると、「花はやや

大きめで青白色、緑色の萼の美しい品種で見頃は二月上旬」とある。この名は日本酒などにも使われており、優雅で古の郷愁につながる響きを持っている。おそらく作者は毎年シーズンに逢いに行かれているのだろう。作者の名前にも「桂」の文字が組み込まれている。

春泥を避けて着地の滑り台　岡田宣子

公園にある滑り台であろう。春の雨か季節外れの雪の後で、運悪く滑り台の着地の所にも泥濘ができてしまい、難儀している様子が見て取れる。中には運動神経抜群の子がいて、春泥をひらりと飛び越えて着地する。皆が拍手するとますます調子づいてくるが、その内に失敗して泥まみれになる。

笹舟のレガッタ春の空の下　反町　修

レガッタは動力のない舟の競技を意味するが、狭義では、ボートの競技のことを言う。テムズ川で開催されるオックスフォード大学とケンブリッジ大学のレガッタ、桜の頃隅田川の浅草で開催される慶応と早稲田両大学のレガッタが有名で、ファンの心を掴んでいる。

さて、掲句のレガッタは、皆が子供の頃に体験した笹舟の競漕である。途中で小川の中の草や棒杭に引っかかったりして思い通りに進まない。声をからして応援した日のことが懐かしく甦ってくる。

曇りなくシンク磨くや春浅し　元田亮一

単身赴任している作者が、休みの日に小まめにキッチンの清掃をしている様子が快く伝わってくる。清掃道具や薬剤を使い分けて隅々まで綺麗にしてゆく。顔が映るほどシンクを磨いて完了か。かつて筆者も赴任地の大阪で体験したことであるが、今はそんな気力は無い。

風花をうけて見上ぐる二年坂　菅原卓郎

二年坂＝二寧坂・三年坂＝産寧坂は京都の清水寺への参道にある石坂で、緩い坂道には、清水焼などを扱う古美術店やギャラリー、京都スイーツの喫茶店や甘味処、京都土産の店などが並んでいて実に楽しい。二年坂で遭遇した風花は実にラッキーで、想い出になるだろう。雪の産地は何処だろう。

袖に触れ揺らぐ大社の赤椿　丸屋詠子

神奈川県の秦野市に出雲大社の分社があると聞いたので、多分其処での些細な出来事であろう。成人式の後で参拝し、友達か或いは家族との記念写真を撮る際に椿に近寄り、着物の袖が振れてしまったのであろう。当人にとっては、これも成人の想い出の一つになる。

春の野に先ゆく猫を見失ふ　山岸久美子

春の野原を行く猫を目で追いながら歩いて行くと、前方にいたはずの猫が不意に居なくなってしまった。隠れるような草叢も無く、自分が目を逸らしたわけでもない、幻の猫であったのか、それとも自分の目がおかしいのか。不思議な日であった。

跳ね起きる枝に目覚めぬ山の春　西幅公子

春を迎えて山の木々の枝に積もっていた雪が融け、発条仕掛のように枝が次々に弾ける様子が詠まれている。その音に眠っていた山が目覚めて春の装いになるのである。冬から春へ移行する山の姿をやんわりと表現している。

試験場へ向かふ十五に春の雪　小林京子

十五歳の年齢から見て、高校受験生が受験会場へ向かう朝の情景であることが判る。春の雪という生憎の天候で、白い息を吐きながら家を出る我が子を見送る親の気持は決して穏やかなものではなかろうが、見送られる子の眼は輝いている。きっと良い結果が出るであろう。

玉眼の仁王ちらりと落椿　阿部幸代

寺院の山門の両脇に構えている仁王像であるが、嵌め込まれている玉眼によって一段と凄みがある。近くにある椿の木から、時折ぽとりと椿が落ちる。その度に仁王の目が落椿に注がれるような気がする。

道着より湯気立ちのぼる寒稽古　横山君夫

剣道の寒稽古であろうか。両者の裂帛の気合と激しい動きによって、寒中と言えど全身から汗が噴き出て、やがてそれが湯気となる。寒稽古の激しさがしっかりと表現されている。

網かけて掬ひたくなる春の星　渋谷きいち

獅子座や北斗七星が目立ってくる春の夜空である。冬と違って温みのある大気の中での星の観察は楽しいもので、潤んだ星を眺めていると、大きな網で掬い取ってしまいたくなる。

「今日はこのまま帰らないで」と春の夢　染谷風子

時代劇のドラマにこういう場面が出てくる。婀娜な小唄の御師匠さんと大店の若旦那といったところか。「春眠暁を覚えず」の慣用句のとおりに熟睡できたなら、このような結構づくめの夢にありつけるかも知れない。

水琴窟

（水明集三月号鑑賞）

池田雅夫

幾重にも稜線染むる冬夕焼　皆川更穂

西高東低の気圧配置で、冬の太平洋側は比較的に晴れの日が多い。内陸の寒空を色鮮やかに染める夕焼に目を見張ったのだ。「幾重にも稜線染むる」であるから山深い村里であろう。稜線も雲も燃え尽くすような「冬夕焼」であった。

暮れ際の光とらへし返り花　古池恵里子

「返り花」は「狂ひ花」「帰り咲」とも言われ、時ならぬ花を咲かせる桜を示すことが多い。晴れ渡った穏やかな夕暮れ時の日の光に照らされた返り花を「光とらへし」と擬人化しスポットを浴びているかのような光景を描き出している。

雪時雨老舗女将の気働き　諏訪サヨ子

「雪時雨」もさることながら「気働き」の語句に魅了された。俄雨がいつの間にか雪まじりの時雨となった。これは大変と、店先の品々を取り込んでいる。格式高い「老舗女将」のかいがいしさ。その気品に相応しい雪時雨の季語に納得。

束の間の陽の移ろひや枯木立　仲田利子

冬の日の短さを「束の間の陽の移ろひ」と賛美している。葉をすっかり落とした木立を照らす太陽が光明のように感じられる。その「束の間」の安穏に心を癒しているのだ。

沼風やメタセコイヤの落葉満つ　小駒さち子

「メタセコイヤ」で思い浮かぶのが別所沼である。沼のほとりに高々と円錐状に立ち並んでいる。針葉樹でありながら落葉する。「落葉満つ」の措辞が新鮮である。「降る」でもなく「舞ふ」でもない。やはり「落葉満つ」が言いえて妙。

訛とび交ふ大鍋けんちん汁　鈴木玲子

「けんちん」とは、中国から伝わった普茶料理の一種で、とうふ、ごぼう、大根、椎茸などを調理したもの。その汁を「けんちん汁」という。大鍋を囲んで賑やかに談笑している。酒に酔いお国訛が次から次へ。とび交う訛に際限がない。

掃除機の吸込みあまし十二月　山下ユリ子

十二月になると何かと気忙しくなる。新年を迎える準備もしなくてはならない。頻繁に使用したために吸い込む力が弱まってしまった。「吸込みあまし」と笑う余裕が頼もしい。日常の暮らしの中で小さな事を鋭く詠んでいてみごと。

咳払ひして壇上の教師かな　高原和子

学校での何かの集会であろう。壇上に登った教師が第一声の前に「咳払ひして」挨拶を始めた。その光景が目に浮かぶ。会場は厳かに静まり返っていて、咳払いが一層緊張感を高めている。教師、とくに校長の話は長いのが通例である。

返上の酔生夢死や年の暮　武田重子

「酔生夢死（すいせいむし）」は、ふらふらと何もせず一生を無駄にすごすこと。「年の暮」にもなると一年のまとめ、仕上げなどやるべきことが次から次へと生じてくる。のほほんとした日常に、気持ちを入れ換えてきびきびと働いている。

着ぶくれてよちよち歩く一歳半　糸井しるく

可愛らしい句に笑みがこぼれる。一歳を過ぎてようやく歩くことを覚えたばかり。「着ぶくれてよちよち歩く」姿がいとおしく思えたのだ。高齢化と少子化、核家族の時代にこんな家族がいたら、きっと生きがいとなっていることだろう。

水仙のほのかに香る仏間かな　加藤ナヲ子

「日本水仙」は5～8個の花を房状に横向きにつける。厳しい寒さの中で凛と咲き、香気が漂う。供花として芳香を放ち、仏間に落ちつきをもたらしている。平穏な日常に感謝。

大漁や波頭の先に石蕗の花　持永喜夫

石蕗は、艶やかな葉が蕗に似ていることから「艶葉蕗」が転じて「ツワブキ」となったと言われている。冬の荒波の中、大漁旗を掲げて漁船が戻ってきた。荒れる波頭の先では黄色く咲き固まる「石蕗の花」が大漁船を出迎えてくれている。

賜りし恩を指折り冬銀河　遠藤人美

冬の夜空を飾る星々。代表的なオリオン座、カシオペア座、アンドロメダ座などがある。さて、生きているということは、周りのさまざまな人の恩を受けている。その恩を一年の終りに「指折り」数えながら感謝し、「冬銀河」を仰いでいる。

石蕗の花黄色に可愛い目の保養　落合和枝

石蕗は菊に似た花を咲かせる。その花を見て「可愛い」と思い、そして「目の保養」になったと感じたのだろう。それを書き表すことが第一歩であるが、その先を詠みたい。同義語、類義語の中から五・七・五に適う言葉を選択したい。

中学の旧き歌本年の暮　藤田寛二

童謡とともに文部省唱歌など、学校で教えられた歌はいくつになっても忘れない。暮の片付けをしていたら中学時代の音楽の教科書が出てきた。暮の片付けのご褒美としよう。

網野月を　選

山紫集

鴨引くや風にリズムの生れし日に　越田栄子

魚信（あたり）待つ置竿二本鴨帰る　丸山マスミ

引く鴨や歓声あがる競輪場　山下ユリ子

引鴨のみづかきの跡滲みけり　本橋稀香

短編の童話を残し鴨帰る　篠﨑紀子

引鴨や最終列車のベル響く　山中いちい

引鴨や我に返りて合掌す　反町　修

鴨引きて我も孤独や池の杭　日高道を

鴨引いて暫しご無沙汰いたします　佐藤克之

行く鴨や洞窟中の熟成酒　新井孝麿

――以上特選

鴨帰る小さき池を広くして　湯浅　和

遠山の棚引く雲や鳥帰る　横山君夫

引鴨の力溜めたる翼かな　横山礼子

鴨帰る平和の味を噛みしめて　青木鶴城

たましひの醸す絆や鴨帰る　秋谷風舎

乱れ無し「くの字」の如く鴨帰る　新　暦文

鴨引いて川面空虚にひたひたと　阿部幸代
行く鴨や母子八羽のなごり水尾　梅澤佐江

引鴨や帰還かなはぬ避難民　荒井倶子
鴨引いて湖水は光り生き生きす　大塚茂子

引鴨に置いてけ堀の二羽の居り　飯田忠男
引鴨や沼を名残りの一巡り　大場順子

鴨引くや玉眼天を仰ぎをり　池田珪子
一時のしぶき騒立て鴨帰る　岡田宣子

引鴨や国境なんぞくそくらへ　池田雅夫
離れまじ大地に幸あれ引鴨よ　奥山粉雪

人間が決めし国境鴨帰る　石川理恵
引鴨の飛翔のあとや目と耳に　加藤でん治

帰る鴨単身赴任早五年　石田慶子
空しさを沼に残して行く鴨よ　熊倉千重子

引鴨や言葉むなしき又はなし　井上燈女
透明の月に送らる番ひ鴨　河野はるみ

引鴨やシヤンシヤン渡る大陸へ　井口俊晴
引鴨やつがひとなりて助け合ふ　小駒さち子

引く鴨に背負ふものなし日本晴　上戸千津子
夕空に祈る引鴨消ゆるまで　後藤綾子

引鴨や首を伸ばして縫ひぐるみ　内田恵子
鴨引くやこのわたつみのつづく先　小林京子

引鴨に舟漕ぐ漁師櫂をふる　梅澤輝翠
引鴨や旅順の寮歌「北帰行」　近藤徹平

残り鴨数へるほどに利根暮れる　佐々木史女　西比利亜は流刑の辺土鴨帰る　染谷風子

鴨引くや広くなりたる沼の面　笹本啓子　引鴨や娘一家も引つ越しぬ　髙橋満耶子

鴨引きし沼に跳ねたる鯉二匹　渋谷きいち　行く鴨に両の手を振る在の人　武田重子

引鴨の大空に解く小さき陣　下川光子　引鴨や今宵の塒はどのあたり　田中章嘉

鴨帰るしばし空き家の川辺かな　菅原卓郎　引鴨の竿にも鉤にもならず発ち　寺内洋子

引鴨や所在無さげな風と水　菅原真理　鴨帰る置き土産なる羽根散らし　外村紀子

鴨帰るなまづの里は市長戦　杉浦理恵　引鴨や携帯電話忘れずに　鳥羽和風

鴨残る番に余る別所沼　鈴木藻好　群なして日々引く鴨や川淋し　仲田利子

引鴨やかつて鴨池ありし里　鈴木玲子　引鴨や古里残し飛び立ちぬ　南條きわゑ

故郷の戦禍知らずや鴨帰る　諏訪サヨ子　引鴨や千里の旅路無事であれ　西幅公子

一族の群れか引鴨幾山河　関谷多美子　引鴨や上州武州分かつ川　野口和子

不安無く恍惚として鴨帰る　瀬戸雄二郎　約束を果たす青年鴨帰る　野田静香

引鴨や沼釣り遊び家族連れ　野村美子　引鴨よ急くな遅るな手を振る子　松本光子

隊列をきれいに決めて鴨帰る　畑宮栄子　引鴨を見上ぐる口が半開き　丸屋詠子

ウォッチャーと目礼かはし鴨帰る　原田秀子　引鴨や着々進むビル工事　宮崎チアキ

引鴨よひとり旅立つ黄泉の国　樋口元美　鴨帰るその日に紅き○を付す　元田亮一

引鴨や白紙のままの一筆箋　檜鼻ことは　見送りは吾と夕映鴨帰る　森　和子

空席の日溜りの石鴨帰る　福田千春　砂時計の無音の刻を鴨帰る　森川義子

鴨帰る村の若人上京す　保坂翔太　鴨並び帰る用意か堤下　森下美智枝

鴨引きて残りし沼の佇まひ　曲淵徹雄　引鴨やマトリョーシカの子沢山　森美枝子

ふたつみつ訛おぼえて鴨帰る　正木萬蝶　鴨帰る戻つて来いよ昆陽池（こやのいけ）　森本早苗

鴨帰る墓域の上の通り路　町野広子　泥靴を洗ふ水嵩春近し　飛永　鼓

鴨引きて力の脱けし昼の沼　松井由紀子

鴨帰る遅れし二羽の水輪かな　松宮保人

山紫集作品評

網野月を

鴨引くや風にリズムの生れし日に　越田栄子

引き鴨が風のリズムでその季が来たことを知るのであろうか。または作者がリズムにふと気づいたということであろうか。それとも引き鴨に惹起されるかたちで作者が風のリズムに変化を読み取ったと解釈した方が良いだろうか。風のリズムを作者がどのように感じ取ったのかは読み手に拠って解釈が異なるところであろう。大切なことは引き鴨と風のリズムの変化の因果関係ではなくて、その同時性なのである。上五の切れ字「……や」を座五の「……に」で受けている構成であるので、句のリズム感からは受け損なっているようにも考えられるのだが、前述の同時性の中に「……に」の助詞の働きが有効に機能しているので、構成としてもしっかりと出来上がっていると考える。

魚信（あたり）待つ置竿二本鴨帰る　丸山マスミ

句の表現しようとする内容とその情報、その情報を配置する構成、そしてリズム、どれをとっても行き届いている句である。上五中七の後の切れが座五の季語との関係性を分断すること無く担保している。上五中七と座五の空間的に設定されている同調性が認められるからであろう。

引く鴨や歓声あがる競輪場　山下ユリ子

競馬ではないのである。とはいえ競艇でもないのである。ましてオートレースなどは問題外である。確か大宮の氷川神社の奥の大宮公園内に競輪場があったかと思う。日本での競輪はギャンブルかも知れないが人間の力を示すスポーツでもある。その性格に清涼感を覚える。引き鴨の見下すところに人間の競技が繰り広げられて、且つ観客の歓声があがっている。本来は俳句のテーマには中々ならないものであるが、上五の季語「引く鴨や」が俳句にしてしまっている。

引鴨のみづかきの跡滲みけり　本橋稀香

湖畔か沼畔の岸辺の少々乾きかけている地面のところに作者は、「引鴨のみづかきの跡」を見つけたのであろう。水面から上がった鴨のみづかきの水が滲んでいるのである。いつもの光景かも知れないが、「引鴨の」ということになれば、名残惜しさも層倍するというものである。帰雁のような哀愁

は乏しいが、「引鴨」ならではの丸みのある味わいがある。帰雁よりもむしろ「引鴨」の方が俳句的かも知れない。掲句がよくその情緒を証立ててくれている。

短編の童話を残し鴨帰る　篠崎紀子

鴨が本来有している優し味が童話の寓話性にフィットしていて、登場物の性格をよく表現しているようである。童話に登場する動物たちのキャラクター設定によく合っているということであり、その文学性に気付いた作者の眼力がこの句に結晶している。

引鴨や最終列車のベル響く　山中いちい

引き鴨は地方によっても異なるが三月から五月ごろに一群を形成して少しずつ帰ってゆくのである。決して越冬地から一度に全ての鴨が帰ってしまうことはない。句中に詠まれたこの鴨たちは、越冬地から終いに帰る一群であろう。

引鴨や我に返りて合掌す　反町　修

引き鴨に「合掌す」る思いを詠んでいる。その思いは作者のみが知り得る事柄なのである。が両の手を合わせて祈る心持は読み手の誰もが共通して知り得る敬虔の心なのである。中七の「我に返りて」が一瞬の心の動きであると同時に、敬虔心の永遠性を確信しているところに句の重深性が感じられる。

鴨引きて我も孤独や池の杭　日高道を

中七に「……孤独や」と言い切っていながら、絶望感は感じられない。むしろ独りでいることの矜持が感じられるのである。「我も」「池の杭」もである。「池の杭」は作者の視線からの存在であろうが、「我も」は作者自身の心持ちである。今秋にはまた鴨渡るということになるわけで、鴨の再来を確信している作者がいるように筆者には思えるのである。

鴨引いて暫しご無沙汰いたします　佐藤克之

口語句であり、多少滑稽味のある句である。何やら昭和三十年代の東宝映画の時代劇に登場する渡世人の台詞のようでもある。渡世人は旅烏というのであろうが、ここは引き鴨であるので、そこが俳諧になっているところである。

行く鴨や洞窟中の熟成酒　新井孝麿

酒づくりの工程の中で、洞窟の中を選んで酒を熟成させている、と筆者は解釈した。上五の季語「行く鴨や」と中七座五の句意が大分に離れている。それだけに解釈が難しいのである。「行く鴨」ということは鴨の越冬地の洞窟を意味していて、帰って行く北の地の洞窟ではないのである。その空間的構成が作者の立ち位置を示しているであろう。

大村節代　選

鼓笛集

老梅の今青春と咲き溢れ
乗り出して窓拭く子らや卒業す
夕ぐれの鳥ふところに糸柳

西幅公子

花冷に寄り添ふ白のペアルック
手に受けしさらりと消ゆる春の雪
蒲公英に囲まれ村の診療所

岡田宣子

菰はづす路地の土塀や風光る
水軍の島の瀬染むる桜鯛
強東風に揺るる閻魔のお燈明

菅原卓郎

朝日受け連山に浮く山桜
下校児の道草さそふ落椿
逆らひて夢大きゆうし入学す

梅澤輝翠

桧扇の房のほつれや宵節句
雛も老ゆ笛に名残りの音を残し
焚上げの箱に母の字雛道具

池田珪子

どこへ行く靴音高し春日傘
春雨の窓辺に聴くやバイオリン
すすり泣くバイオリンの音春の雨

山岸久美子

落石注意落つるを見せず山椿
花の数あふれこぼるる藪椿
落椿美久仁小路に艶歌きく

渋谷きいち

ほつこりと福寿草咲く狭庭かな
菜の花や散歩の曽孫蝶になる
香華なき公方の墓や桃の花

佐々木史女

寄書の文字の掠れや卒業す
春菊の香ふくいく朝の膳
春闘の手書の数字躍りけり

村杉清吉

新男児厨房に入る四月かな
啓蟄やミクロの世界動き出す
厳粛なお経の響く彼岸の日

早暁の赤き月あり震災忌
八重咲きの赤き椿の重きこと
潦覗く真赤な木瓜の花

小鳥の巣梯子を運ぶ兄弟
明日またと手を振る園児卒業す
残り居し鴨を眼下に鴨帰る

春眠の窓を静かに雨流る
春眠や後生大事と単行本
三文より春眠貪るほうがよし

雪消えて野鳩ついばむ黒き畑
帰る子の荷物にそつと蕗の薹
春の闇露天湯けむり白く溶け

戦争が麦の畑に仁王立ち
梅まつり有田自慢の大花瓶
雛飾り老いたる母の独り言

千坂平通

万物の汚れを流す春の雨
春の雨街に音だけ響きをり
天辺の侍ジャパン桜鯛

飯田忠男

香り満つジビエ料理や春の夕
春夕焼心優しと褒めらるる
八朔柑園児の声援収穫祭

山下ユリ子

雪解の野原を走る子どもかな
春時雨犬横抱きにして走る
何時の間にか横になりけり春炬燵

寺内洋子

朝の陽を纏ひ輝く白梅花
夫の度量は夫の優しさ桃の花
桃の花天才棋士の白き指

湯浅　和

☆

佐藤克之

☆

樋口元美

南條きわゑ

高原和子

関谷多美子

鼓笛集作品評

大村節代

老梅の今青春と咲き溢れ　西幅公子

老梅というからには、年を経て風格のある梅の木であろう。「桜伐る馬鹿梅伐らぬ馬鹿」の慣用句通り、梅は剪定し、樹形を整えてこそ、庭木としての趣きが出る。形が整い、風格のある老梅を、それでも青春のように、花が咲いていると謳う作者の感覚に共感する。

蒲公英に囲まれ村の診療所　岡田宣子

山あいの素朴な診療所。内科から外科まで診療してくれる先生を、村人は皆、信頼し尊敬している。

診療所を囲む一面の蒲公英が、のどかで平和の村を現してやさしさ、暖かい人々の暮しが伝わる。

強東風に揺るる閻魔のお燈明　菅原卓郎

おどろおどろしい閻魔大王、忿怒の相をし人間の生前の善悪を裁量するという。強風でお燈明がゆれ、閻魔は顔も姿も一層こわい。

鼓笛集巻頭（四月号）

私の好きな一句（自句自解）　北山建治郎

流れ星落ちてライオン木に登る

雄大な草原に「流れ星」が落ちたら、サバンナの王者ライオンはどうするだろうか。びっくりして木に登り、きょとんとしたかわいい顔で、こちらを見ている姿を想像してしまいました。楽しい句となりました。

「余分に水明誌」をご希望の方へ

水明会員の方に限り、「水明誌」を半額でお譲りします。

ご希望の方は総務部までお申し込み下さい。尚、以前の号も在庫があれば、お譲りします。

第60回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は7月31日（必着）

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催して行う伝統のある大会です。今大会は、協会の一般社団法人化と第60回を記念しての盛大な大会を予定しております。協会員に限らずどなたでも参加できますから、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。

□**応募規定**　3句一組・2千円　何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。**［3組9句同時投句に限り、6千円を5千円にいたします］**

前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、お名前、電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句料は普通為替、定額小為替（無記名で）、現金書留（必ず作品同封の事）、又は郵便払込（郵便局の青い払込取扱票をお使い下さい）加入者名・現代俳句協会、振替口座番号・00160―6―52603・振替払込受領証のコピーを投句用紙に必ず貼付してください。

□**送付先**　〒101-0021　東京都千代田区外神田6-5-4偕楽ビル外神田7階　一般社団法人　現代俳句協会全国大会係

☎03―3839―8190

□**締切**　**7月31日必着**

□**顕彰**　協会の会員誌『現代俳句』に優秀作品を発表するほか、協会刊行物に採録。

□**賞**　大会賞、後援団体賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞。

□**全国大会**

令和5年11月3日（金・祝）午後一時より

「東天紅」上野店　〒110-8707　東京都台東区池之端1-4-1　☎03―3828―5111

□**記念講演**　赤坂憲雄先生（民俗学者）

「あくまで文学的な、武蔵野語り（仮題）」

□**講評**　中村和弘会長はじめ協会幹部

□懇親会　午後5時より（会費8千円）

■特別選者名

宇多喜代子　宮坂静生　寺中和弘　秋尾敏　高野ムツオ　対馬康子　小林貴子　永井江美子　久保純夫　筑紫磐井　後藤章　安西篤　伊藤政美　桑原三郎　小菅白藤　鈴木正治　舘岡誠二　辻脇系一　前川弘明　前田聰　山崎浩一　和田

■一般選者名

赤野四羽　網野月を　有手勉　有村王志　五十嵐秀彦　石寒太　石川青狼　伊東類　井上論天　岩淵喜代子　植垣規雄　植田密　宇佐美孝　宮坂静生　中村和弘　寺谷子　高野ムツオ　大石雄鬼　高橋恒行　高橋和彌　高橋健文　福本弘明　健男保徳　久行　播磨穿鷹　原田要三　原雅子　宮坂静生　中村和弘　寺谷子　高野ムツオ　大石雄鬼　高橋恒行　高橋和彌　高橋健文　福本弘明　健男保徳　久行　播磨穿鷹　原田要三　原雅子　宮坂静生　中村和弘　寺谷子　高野ムツオ　大石雄鬼　高橋恒行　高橋和彌　高橋健文　福本弘明　健男保徳　久行　播磨穿鷹　原田要三　原雅子　宮坂静生　中村和弘　寺谷子　高野ムツオ　大石雄鬼　高橋恒行　高橋和彌　高橋健文　福本弘明　健男保徳　久行　播磨穿鷹　原田要三　原雅子　宮坂静生　中村和弘　寺谷子　高野ムツオ　大石雄鬼　高橋恒行　高橋和彌　高橋健文　福本弘明　健男保徳　久行　播磨穿鷹　原田要三　原雅子

◆注意　応募規定に違反した場合は、発表後でも入賞を取り消すことがあります。

［主催］一般社団法人 現代俳句協会　［後援］文化庁・毎日新聞社・朝日新聞社・読売新聞社

春の吟行会の記

曲淵徹雄

春の吟行会は、令和五年四月四日に浦和コミュニティセンター第十三集会室を句会場に、四十四名が参加して開催された。かな女句碑のある別所沼公園と調神社、玉蔵院など浦和周辺を吟行して、十二時締切りで二句を投句した。

昨年の春の吟行会はコロナ禍のためやむなく中止となったが、コロナもようやく収束する状況になり、満を持しての開催である。今回が水明行事句会に初めてという三名の方の参加もあり、座が賑わっていた。

清記、選句が済み、網野月を幹事長の開会の辞に始まり、青木鶴城氏の司会で句会が進行した。

司　会　青木鶴城

主宰の挨拶　山本鬼之介

コロナ禍でのここ三年であったが、今年は順調に滑り出した。桜が例年よりも早く咲き始めたが、その後の冷え込みで長持ちし、花の咲いているところを見ることができてよかった。今回の吟行会の主担当であるりんどう俳句会をはじめ、事業部、総務部ほかの協力により開催していただき、有難うございます。

選句　主宰は多選
　雪欄作家十句、一般参加者五句

披講　一般選　曲淵徹雄
　雪欄選　保坂翔太
　主宰選　山本鬼之介

主宰詠

現世の弟子と句碑のかな女の花見かな
四月寧日パルコ十階遠筑波

主宰選

三極（天・地・人）

天　裏路地の木蓮粋な色使ひ　真理

地　境内の句碑に「烋」の字春惜しむ　鶴城

人　ぶらり来てぶらり一周春の沼　君夫

超特選

残花なほ旅立ちを待つ玉蔵院　昇
花過ぎの渾身で立つ古木かな　喜恵
宮参り和服の裾に飛花落花　節代
囀の真つ只中のかな女句碑　かつ子
落花しきり万朶の描く幾何模様　桂子

古寺の散る花つもる甍かな　卓郎
神苑に名残りの花の降るばかり　道を

特選

御下がりの背広に一つ桜蕊　はるみ
境内は芽木の天蓋かな女句碑　治子
春昼や街は萌黄のベール越し　幸代
水音は兎吐く水蝌蚪の国　稀香
沼底に神の足音春祭　まりこ
春闌ける目引き鼻引き雄鳥　月を
春の風杭の頭に名無し草　徹雄

普通選

花散りて瞼に残る桜闇　月を
犬よぎる大社の小池蝌蚪肥ゆる　翔太
狛兎連るるいとし子若葉風　徹平
メタセコイアの春の鼓動の天を突く　順子
散るさくら池の面に浮く鯉の口　延昭
桜蕊降れよ女の耳熱し　光子
春昼や釣糸垂るる別所沼　修
木の芽風目を細めたる狛うさぎ　和葉
天高くメタセコイアの若葉かな　チアキ
傾げたる松に魚飛ぶのどかさよ　京子
風の指紋水面に揺るる沼の春　マスミ
狛兎ほかに何羽や春深し　亜弥子
春の昼紙飛行機の低飛行　茂子
園児らの帽子ピョンピョン夏近し　慶子
兎の口の手水ゆるるや桜まじ　卓郎
園児らを見守るがごと糸桜　章嘉
桜散り杜陰広がる閑けさよ　知子
雲去りてかな女の句碑に残花かな　道を
宮の森欅の芽吹き天を抱く　公子
鬱金ざくらに触れてかな女の句碑のもと　由紀子
竜舌蘭に当たりて尖る春の風　風子
春愁や水面にゆるる木々の影　静香
古池にうさぎ水吐く春社　久美子
蒼天のブーケや鬱金桜はや　君夫
花の昼修正液をちと借りぬ　かつ子
かな女句碑銀杏芽吹きに包まれて　美智枝
のどけしや釣り竿の浮き立ちしまま　輝翠
花散るや園児の声に振り向きぬ　宣子
春うらら古社でお参り吉と出る　美子
慰霊碑に桜蕊降り鳩が翔ぶ　まりこ
春風や母子寄り添ふ狛兎　サヨ子
春惜しむ漣波寄する枯山水　紀子
天を突く公園並木芽の息吹　鶴城
春闌くや俳縁確と浦和宿　昇
初蝶と飛天連れ舞ふ地蔵堂　治子
沼は春久し振りですうなこちやん　喜恵
小さき子の頬のあからみ落花かな　幸代
桜吹雪に身を任せたし今日の吾　真理
散る花の大地に描く抽象画　節代
選挙カー疎まし花の散りぎはに　稀香
沼の端に赤らむ気根春深し　徹雄

披講が終了した後、主宰より全句につき一句ごとに丁寧な講評があった。なお、「今回は投句に誤字のある句が何句かあったが、せっかくの句であるので、注意して欲しい。」との言葉があった。

講評後、主宰から三極に色紙、超特選には短冊が授与された。高得点者には水明より記念品が贈られた。

高得点者

一位　柚木治子　　二位　横山君夫
三位　染谷風子　　四位　外村紀子
五位　青木鶴城　　六位　境　延昭
七位　菅原卓郎　　八位　山岸久美子

終りに大村節代氏より閉会の挨拶があり、本会は午後四時三十分に終了した。

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木和子　報

春服買ふ一万円台をめどに　和　葉
蓬摘む妻を薄目に肘枕　京　子
砲台跡もデートスポット春うらら　理　恵
卒業や滑り台から空へ飛ぶ　拓　真
平均台の少女の手足風光る　はるみ
すべり台一直線に下りて春　順　子
草摘むや弾む近道丸木橋　喜　恵
摘草や指美しくつみ進む　和　子

――以上特選

摘草の先に現はる武蔵野線　亮　一
摘草や社名のロゴの紙袋　延　昭
芝居はね飛び込む屋台月朧　徹　平
摘草や声を上ぐれば声返る　拓　真
草摘みの軽軽と跳ぶ小川かな　稀　香
子の笑顔見守る台地たんぽぽ野　はるみ
その台詞待つていました春歌舞伎　マスミ
草摘みて青き香りにまみれけり　由紀子
目配せし結界越えて土筆摘む　節　代
摘草や紙飛行機の失速す　喜　恵
蓬摘む青く光れる指の先　順　子
芹摘むや水の明るき休耕田　京　子
摘草の指の黒ずみ香で許す　理　恵
掌にかくれてしまふ蓬かな　チアキ
野仏を片手で拝し草摘めり　治　子
台東区は昔遊び場春爛漫　和　葉
うららかや仏の台座薄埃　和　子

第二例会（東京本所）

山中みどり
青木鶴城　報

由縁なき名もなき坂に濃き菫　いちい
風に鳴る絵馬の音にも春来たる　り　こ
誰彼に笑顔向けたき春の昼　みどり
宇宙漂ふ地球に乗つて春の昼　峰　雄
縁石のすみれ愛でつつ立ち話　敏　江
通り抜けの蹊と信じ春の昼　鶴　城

――以上特選

解体のざわめき続く春の午後　り　こ
海石榴市や銅鑼の音の無き春の昼　士　史
春昼の時鬱々と過ぎ去りぬ　峰　雄
花ミモザ急に人気の神社あり　敏　江
尾道に鐘ひとつ沁む春の昼　いちい
一抹の寂寥満開の白木蓮　みどり
解け出しの音に誘はれ山菫　鶴　城

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

静かなれど富士は火の山冴返る　康　世
廃園のマリアの土台春埃　〃
春埃舞ふ白日の兜町　萬　蝶
春塵や消毒済みのカウンター　雅　夫
物干しに躍る猿股春嵐　徹　雄

啓蟄の水平線を出る陽かな　徹雄
稀覯本の天金に積む春の塵　昇
諳んずる北信五岳山笑ふ　〃

——以上特選

子供らの山羊呼ぶ声や春霞　星歩
春雷や包丁塚に緋の鳥居　萬蝶
四阿に鳥の声聴く雨水かな　康世
ざらつきぬ未練の盃よ春の塵　理恵
山彦の左右ちりぢり山笑ふ　雅夫
春日影はらりと光る椅子の鋲　徹雄
正宗の閉ぢし眼に積む春の塵　順子
眼の色に落胆透けるうかれ猫　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

急流に跳ぬる小鮎の身の熟し　寛治
生返事ばかりしてをり春の風邪　〃
奔流のしぶきに紛ふ上り鮎　由紀子
若鮎の群れてダイヤの如き堰　暦文
良き文の届き本復春の風邪　順子
滾る瀬を光となりて翔ぶ小鮎　マスミ
鼻声の似合はぬ漢春の風邪　昇
若鮎やへそ出し踊るラップの子　喜恵

——以上特選

春の風邪枕辺にある旅の本　マスミ
川舟の進水式や上り鮎　翔太
パソコンの碁敵探す春の風邪　でん治
不器用な喉に地卵春の風邪　暦文
暮れてなほうつらうつらと春の風邪　玲子
かがやける早瀬の弾く上り鮎　順子
水跳ねて若鮎はねて瀬と出合ふ　光子
春の風邪目覚めにさがす夢の声　延昭
水漏れは分らず仕舞春の風邪　寛治
春の風邪紅茶に浸すおせんべい　恵子
春の風邪神の御告げの骨休め　修
若鮎の反り身凜々しく化粧塩　昇
若鮎の気負ひの眼放流す　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

陸奥の十年を思ふ揚雲雀　水尾
結納の口上凜と春障子　〃
我が名呼ぶ細身の影や春障子　宣子
波音のとどく旅寝の春障子　玲子
初雲雀天のふところより美声　佐江
切り貼りの花の浮き立つ春障子　〃

——以上特選

ホールインワン雲雀高みへ河川敷　はるみ
繊細な組子際立つ春障子　宣子
青空へ音譜を散らす揚雲雀　玲子
お茶室に入る朱の帯春障子　義子
見合ひの席がほつと和らぐ春障子　理恵
仏壇の部屋に薄陽の春障子　美佐尾
見霽かす天守は遠しひばり鳴く　水尾
だんらんの声の明るき春障子　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

野川まだ水音浅し蒲公英野　マスミ
口あけて眠る隣客春の昼　千春
夕ぐれは慎ましやかに鼓草　佐江
たんぽぽの上とほり来し風に倦む　ひろこ
たんぽぽの夢は遥かに尾瀬の沢　俊晴
藤菜一輪若き二人の仲直り　理恵
内親王の通ふキャンパス鼓草　萬蝶
非常口のピクトグラムや春の闇　〃

——以上特選

宅配やたんぽぽのわた肩に乗せ　慶子
梅東風や干菓子老舗の早仕舞　ひろこ
露西亜たんぽぽ露西亜作家に耽りし日　佐江
薄口に手毬麩ふたつ雛の膳　京子
たんぽぽの絮ふはふはと巫女溜り　マスミ
柵越しに蒲公英かざし山羊を呼ぶ　星歩
たんぽぽを避けて少年落球す　千春
先祖代々口伝の秘薬蓬萌ゆ　はるみ
蕗味噌や改札口に婆の顔　鶴城
開けばのろけの口恥づかしや春の恋　理恵
義士なれば春日へ挿頭す合口　月を
不意打の春一番に目の痒み　俊晴
分校にきらきらネームたんぽぽ野　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

清濁を併せなにはを春の川　ゆら女
啓蟄やマグマしづかにお静かに　〃
小石ひとつころり動かし春の川　寺内洋子
春場所や川面を弾む寄せ太鼓　和子
早退の生徒にまぶし春の川　道子
白無垢の花嫁が行く春の川　早苗
花見鳥遣る気スイッチオンとなる　〃

――以上特選

亀鳴くや木地師の村の水底に　玲子
春の川天地の恵み奏でつつ　千津子
啓蟄の首に掛けたる迷子札　ゆら女
上流向き鮒並びをり春の川　寺内洋子
観光筏は完成間近春の川　和子
山笑ふ怖づ怖づ渡る丸木橋　道子
前かがみの菩薩立像藤の花　千枝子
二十個の花器盛りあげて霞草　千世子
ほつれ髪そつと手直し雛納め　満耶子
童謡が聞えてきさう春の川　嶋田洋子きわゑ
紀の川をのぼる釣舟風光る　早苗
春の川中州に命育ちをり　〃

☆　☆

昔話あれこれ26

一言主（ひとことぬし）の大神との出会い

雄略天皇が葛城（かずらき）山に登られた時、お供の官人およそ百人が、赤い紐を付けた青摺りの衣服を着ていた。

その時、向うの山の尾根伝いに山に登る人達がいた。見ると天皇の行列そっくりの人数、着衣で人々の様子も似ていた。

天皇は「この大和国に私をおいて大君はいないのに、私と同じ行列を作って行くのは一体誰だ。」と尋ねた。

すると向うの人も天皇と全く同じ言葉を返してきた。天皇は大層怒り弓に矢をつがえられ、官人たちも矢をつがえた。すると向うの人達も同じように矢をつがえるではないか。

天皇は「おい、そちの名を名乗れ。互いに名乗ってから、矢を放とうではないか。」と仰せになった。

そこで相手は初めて答えた。

「私から名を名乗ろう。私が凶事（まがごと）も吉事（よごと）も一言でお告げする葛城の一言主の大神である。」

天皇はこれを聞いて恐れ謹んで申し上げられた。

「畏れ多いことでございます。大神が現実の人間の姿でおいでなので、気付きませんでした。」と申し上げて天皇ご自身の持つ太刀や弓矢をはじめ官人たちの着ていた衣服を脱がせて献上した。

一言主の大神はお礼の柏手を打ち、献上品をお受け取りになった。

天皇が泊瀬（はつせ）の朝倉の宮に帰られる時、一言主の大神一行は、山の峰に隙なく並んでお送りした。

この一言主の大神はその時初めて出現されたのである。

（注　偉大な神は偉大な天皇によって見いだされるということを描こうとしている。

古典文学集成　頭注）

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

あゆみの会（浦和）

水温む親亀子亀甲羅干し　啓子
子に託す父の家系図春彼岸　重子
小流れは利根の水系芹を摘む　倶子
水温む白菜大葉広げをり　山遊
大手振る理系の女子や風光る　和
我が出自家系図で知り春の雷　藻好

櫟の会（浦和）

春の庭光のシャワー草花に　富美子
決断の少年ぐんと漕ぐ鞦韆　千重子
空いつぱいヴィヴァルディ流る春の園　敦子
空青くブランコ漕ぎて鳥になる　亮子
ブランコに身体を乗せて夢乗せて　妙子
子ら去りてふらここ風と遊びをり　朋子
ブランコの幼児気遣ふ親ごころ　裕誌
草も木も風も光も春の園　彰二
春の園恋のかけらが落ちてゐる　克之
漆黒の裸婦像光る春の園　富子
ブランコの小さき背を押す大きな手　文子
ブランコを捨てて飛び込む母の胸　治子

めだか句会（浦和）

ぽこぽことミルクティー注ぐ花曇　敦子
目覚ましの鳴らぬ休日花曇　十三子
月面にいつか立つ夢巣立鳥　六弦
花曇ぼんやり過ごす他はなし　忠夫
花ぐもり苦屋の残る沼畔　知子
別嬪さんにいつまた会へる雛納　はるみ
巣立鳥落ちて飛び立つ一羽ゐて　月を
世の中に敵の十人巣立鳥　鶴城
花曇一気に晴らすホームラン　美智

水明小川句会（小川）

日を浴びて色極まれり犬ふぐり　きよ子
登下校安全見守る畦すみれ　綾子
安らぎの一日をくれた春の雨　みや
安眠のアロマに満つる春の闇　栄子

珊瑚の会（浦和）

蕗味噌や京の町家の片泊り　マスミ
見えがくれ赤き花より眼白かな　水尾
蕗味噌を当てに故山と差向ひ　昇
蕗味噌をトーストパンに朝の卓　恵子
蕗味噌少し焦がして夫の酒の当て　史代
蕗味噌の苦味は旨味酌み交はす　広子
眼白来る上手に残す果実の芯　和子
蕗味噌や竹馬の友と地酒くむ　和葉
蕗味噌や空気のやうな仲なりし　かつ子
放課後の掃除当番目白来る　喜恵
目白来る裏木戸少し傾斜して　節代

水明熊谷句会（熊谷）

瀬の浅き湾を染めんと桜鯛　卓郎
魚味始水引をつけ桜鯛（まなはじめ）　秀子
お七夜へ一句を添へて桜鯛　燈女
女生徒の国家独唱風光る　栄子
弥生日和弥生土器研謝恩会　徹平
ランドセル輝く童弥生かな　正行
たえまなく神の鈴鳴る弥生かな　茂子

芽吹句会（浦和）

馬酔木咲く筥に残りし母の文　千重子
初蝶のたどたどしきを愛づるかな　チアキ
春の夜や恋文を書くペンの音　修
回文の軽き擽り木瓜の花　富子
初蝶来昭和以来の深廂　ひろこ
庭の花壇をステージとなし初蝶来　玲子
天気図は縦縞模様春疾風　道を

芙蓉句会（浦和）

やはらかに水面かがやき山笑ふ　正子
山笑ふ吾子壮年の貌となり　道子
夢現何するでなく春炬燵　税子
この景は夢か現か山笑ふ　仁
果樹園の伐採跡や山笑ふ　美子

櫻蔭句会（浦和）

啓蟄や朝な朝なの土の盛り　茂子
縄飛びのおかつぱ揺るる糸柳　公子
真先に鎧脱ぎ捨て猫柳　行雄
知らんぷり花街あとの大柳　由紀子
蔵町や柳見上ぐるサッパ舟　美智枝
古き家によりそふごとき糸柳　千恵
一すぢの川の流れに添ふ柳　久美子
千本格子並ぶ町家は柳越し　真理
啓蟄や自転車乗りを覚えし子　多美子
啓蟄の吉野古道の和らぎし　美子
啓蟄の畑の目覚めや耕運機　幸代

皐月の会（浦和）

男ゐぬカリブの女干鱈売る　山菜
春光の男坂往く一人旅　更穂
朝日子に羞づる風情や初ざくら　光代
初桜吾が産土の目黒川　美佐尾
涅槃西風男結びをほどきけり　珪子
発車ベル急ぎ「三個」と山葵漬　順子
山葵漬旨しと褒むる不意の客　紀子
「男だろ」の掛け声残る春の霜　静香
調の宮石のうさぎに春の雪　孝麿
叔父の霊祀る靖国初桜　暦文
傘寿きて酒と女と山葵漬　きいち

りそな俳句会（浦和）

流氷や闇に魔物の聲のして　道を
港町無人番屋の流氷期　寛治
流氷や軋みて迫る白き帯　暦文
海明けにやや色白な漁師かな　建治郎
流氷原光微塵の海と空　マスミ
剪定や使ひ古しの竹箒　雅夫

りんどう俳句会（浦和）

山笑ひ富士はにつこり日本晴　弘夫
学帽は少し大きめ山笑ふ　君夫
店名は「天手古舞」よ山笑ふ　のりこ
若狭こそ季語そのままに山笑ふ　治子
啓蟄の五体の動きかみあはず　徹雄
武甲山削られしまま山笑ふ　利子
揺れ動く水底の魚春兆す　寛治
制服に湧き立つ希望山笑ふ　サヨ子
老農の太き動脈田を返す　風子
スケボーの驚天動地春一番　翔太
山笑ふ小さき背中のランドセル　紀子
陽春の書肆にぜんかん動物記　卓郎
生れし子と添寝の今宵初蛙　順子

青葉の会（浦和）

逆立ちや春の地球を持ち上ぐる　美紗子
カメラ目線はすべて逆光風光る　真理
春の夜ホームラン打ち大逆転　美智枝
山里の朽ちたる家の藪椿　美子
カルメンの高鳴る踊り紅椿　公子
燃え尽きて潔く散る山椿　啓子
玄関に客もてなさず椿落つ　洋子
シニアの学び友の輪ふえて卒業す　和子
惜春や店仕舞する古本屋　輝翠

きざきサークル（浦和）

真田井戸の深き抜け穴春の闇　昇
庚申さまの小屋に供ふる蓬餅　光子
酔客を程よく包む春の闇　喜代子
節くれを誇る棟梁草の餅　健司
揺り椅子に若き日の夫春の闇　啓子
そつと出す喧嘩のお詫び草の餅　和
父来たる御重に草餅ぶら下げて　和枝
春の闇ブラックホールのある宇宙　倶子
久々にピアフを聞こう春の闇　和子

雛の会（浦和）

陽炎や坂の下から駆けてくる　輝翠
陽炎を乗せて帰りぬ渡し舟　燈女
白椿美男に在す阿修羅像　喜恵
せせらぎに映る面影白椿　チアキ
白鳳仏の気高さに似て白椿　佐江

野菊の会（与野）

踏青の靴底しかと応へたり　美代子
リス飛ぶ走る大木の芽の機嫌　和子
大仏に隠るる辛夷栗鼠ひそむ　清子
飛び出す絵本リスを畳みて卒園す　まな
火の島の散り敷く椿リス走る　知子
だしぬけに栗鼠の横切る木の芽道　光子

水明鬼石句会（鬼石）

縁欠けし益子の花瓶梅の花　和子
竹林の姿は見せず初音かな　ナヲ子
婆嬉し孫の運転春うらら　洋子
白蓮咲き建売住宅完売す　聡子
チーズ切るナイフの曇り春の宵　紀子

若狭水明会（若狭）

ジャケットのやくざな僧の伊達めがね　寛久
春景色「坊主ですわ」と太公望　登美江
春光の満たされてをり城子句碑　初花
春光や大きく広げ日本地図　白鷺
春光や上棟祝ふお赤飯　八重子
春光や鳥のぶつかる硝子窓　郁子
春光や眠る大地へ投げキッス　鼓
春光やモンマルトルのベレー帽　ことは
名水や春の光を手で抄ふ　和風
雪虫や渓流に沿ひ子等駆くる　保人

鶴川山百合句会（町田）

羊羹はやつぱり虎屋夜の梅　雄二郎
観梅やつまらなさうな奴のゐて　月を
梅白し或る夜告白受けしあと　史代
唄ふごと語るごと梅ほころびぬ　広子
紅梅の小さき声する頑張れと　由美子
絵馬ならす風まろやかや梅の花　千春
女子会は米寿の五人梅日和　理恵
飛梅や誰を慕ひてここに来し　美千子
梅林ゆく紆余曲折のふたりかな　玲子

蝌蚪の会（浦和）

子午線の潮の流れに桜鯛　さち子
彼岸西風御百度を踏む女性（にょしょう）かな　風舎
姿よし色よし糶の桜鯛　朝香
初桜潔白叫ぶ六十年　礼子
水槽に駆け寄る園児桜鯛　ひさの
桜鯛沖の釣舟さんざめく　しるく
彼岸西風塔婆の文字の新しき　元美
革婚式二人で分つ桜鯛　月を
桜鯛不合格とは言へぬまま　鶴城
彼岸西風手向けの花の揺らぎをり　宣子

山茶花（浦和）

調教馬の靡く鬣風光る　マスミ
風光る健康診断無事終る　清一
沈丁花暗きしげみの香りたる　美江子
補聴器の訓練期間風光る　光子
沈丁花思ひ出ひろふ日暮れ道　綾子

水明澪つくし句会（大阪）

枕辺の春にすつぽり眠り姫　智恵子
老いの眼に声ばかりなる揚雲雀　洋子
啓蟄の沸いて出でたる児らの息　人美
特養の老女微笑む雛飾　きりり
身を焦がし星となるまで春の猫　ゆら女

野ばらの会（浦和）

初黄蝶ホースの飛沫（しぶき）躱しとぶ　秀子
初蝶来ままごとあそびに俯瞰せり　茂子
迷ひ道一人静に出合ふ運　夏江
囁き合ふ二人静の佇まひ　栄子
青空をかきまぜながら蝶々来　みき子

繭の会（浦和）

故郷へパンダは春の雲に乗る　まりこ
啓蟄や小さきもの皆一直線　夕峰
春の夜や小半酒に恋の夢　風子
春の雲つかず離れず風まかせ　風舎
つかの間の夢からさめて春の雲　比早子
席替への列に並びて雀の子　さよ子
饅頭の焼印は鳥春の雲　珪子
親のゐてその親のゐて雀の子　月を
あはあはとふはふはふはと春の雲　鶴城
熱戦のスタジアム過ぐ春の雲　京子

若鮎句会（浦和）

桃の花術後日記は四冊目　さなえ
うたた寝の数分のはず春炬燵　稀香
卒業の餞にこそ平和な世　芳春
卒業の帰りの道を一歩づつ　拓真
あと五分待つてとライン春の風　順子
蒼天にボール蹴り上げ卒業す　秀子
結び目が緩くなりだし卒業日　紀子
一枝の鋏の音や桃の花　節子
春分や昨日も今日も吾一人　香音子
桃の木に桃の花咲く天地かな　月を
忘れない筈の友情卒業式　鶴城
名の消えし雑巾絞り卒業す　喜夫

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

古傷に生傷かさねうかれ猫　延昭
天こ盛零して見せる蜆売　美枝子
補助輪の取れて三周山笑ふ　健司
右端が居場所の写真卒業す　早都子
湖岸往く電車見送る蜆舟　俊晴
校舎背に最後の一歩卒業す　淑子
そつと持つ模様の光る薄氷　まき子
有明の薄氷にある風の跡　倶子
四方の山校歌に称へ卒業す　昇

ミモザの会（横浜）

仕立服届くる春の海岸線　玲子
白魚は小舟に乗つてやつて来る　慶子
ひな祭り遺品整理に父母の愛　栄子
歳月に想ひを馳せる雛祭　詠子
白魚や指のきれいな女でした　亜弥子
到来の鳴門若布の御味御付　萬蝶
男神・女神の吉凶いかに御神渡り　史代
うららかや御者粛粛と馬車の列　千春

神戸大池句会（神戸）

播州平野ゆるり蛇行の春の川　早苗
春陰や自然界にて花粉症　千津子
春昼の潮の香強きビル狭間　玲子

和歌山水明句会（和歌山）

豊漁の汽笛鳴りづめ鰆東風　和子
春雷や引戸の重き銃砲店　道子
花の色忘れしままに根を分くる　千枝子
アスパラや瓶から瓶へつなわたり　千世子
腕時計は爺の借り物受験生　満耶子
新聞に線引き覚ゆ春の夕　きわゑ
合格にでんと座るや牡丹鯛　洋子
しあはせをかをりにすれば風信子　廸代

水明松本句会（松本）

立春や時の流れをつくづくと　陽子
青空に映えて見上ぐる梅の花　マリス
いつまでも仏壇に届くバレンタイン　玲子
ハミングで閉づる楽譜や春浅し　寿子

たかんな俳句会（川口）

水温む新書の棚に「ぼけの壁」　久美子
水温むいちにち光る波の群　のり子
早朝のラジオ体操春確か　福美
水温む贔屓力士の勝名乗り　小麦
確りと母の筆文字雛納め　義子
昭和の日確かに鍵は掛けた筈　鶴城
堰いくつ光放ちて水温む　水尾
確信犯の犬の眼と合ふ春の泥　静香

円卓の会　（浦和）

清明の野にも山にも雨師来たる　翔太
青空や黒点となる揚雲雀　修
清明や声のころがる土手遊び　静香
囀や道なき道に誘はれ　亮一
入学や振り返らずにエアポート　輝翠
清明や弥勒菩薩の指の先　道を
ペンギンにイカロスがゐて巣立鳥　月を
鳥雲に入る愛しき人を道づれに　鶴城

俳句の手ほどき　（岩槻）

山壁の藍ふかき日や白鳥引く　水尾
白鳥帰る其は望郷の御霊の地　佐江
白鳥の引きし流れの疾きこと　延昭
春光の潮目遥かや巡視船　義子
春真昼異界まさぐる内視鏡　徹平
白鳥去り若人街へ鄙の朝　翔太
手を合はせ見送る姿白鳥帰る　倭子
白鳥帰るスワンボートの残されて　忠男
白鳥帰る漁船出港北の海　美子
引く白鳥のもぐもぐたいむ旅仕度　桂子
羽を寄せ合ひて白鳥残りけり　幸代
白鳥帰る家族のきづな深めつつ　久美子
殿方の投ぐる視線や春ショール　卓郎
蜥蜴出てしばらく宙を視てゐにり　かつ子

柿の木塾　（浦和）

青饅やをんなの鎖骨透きとほる　かつ子
真すぐには行けぬ砂浜涅槃西風　和葉
青饅を嫁に数ふる婆の皺　章嘉
青ぬたや遊び呆けた野のみどり　節代
累代の藩主の墓石涅槃西風　昇
百景に叡山仰ぐ涅槃西風　水尾
青饅や故里の山近づきて　恵子
猫は日溜り雀餌を欲る涅槃西風　和子

光が丘俳句教室　（東京）

黄砂降りへへのもへじボンネット　はる
奈良の旅まづは黄砂に迎へられ　康子
この次は名字の変はる雛納　典子
晴れてゐて心は晴れぬ黄砂かな　理恵

新樹の会　（浦和）

名画座のポスター見入る春日傘　清吉
柳の芽分けて見遣るや閻魔堂　風子
風流や傘に纏はる柳の芽　道を
名物のおでん頬ばり花見酒　修
新緑や鯱鉾光る名古屋城　平通
若い衆の頬の血色柳の芽　徹雄
名号の響く古刹や八重桜　鶴城

訃報

宮崎紫水（季音花欄）様
去る三月三十一日
病気の為、逝去されました。
ご冥福をお祈りします。

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和五年三月三十一日現在―

池田珪子　3口
綿貫ひさの　5口
山戸美子　3口
匿名　6口

―合計17口―

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。詳細は６月号・７月号に掲出し、指定「参加申込書」は７月号に添付いたします。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。

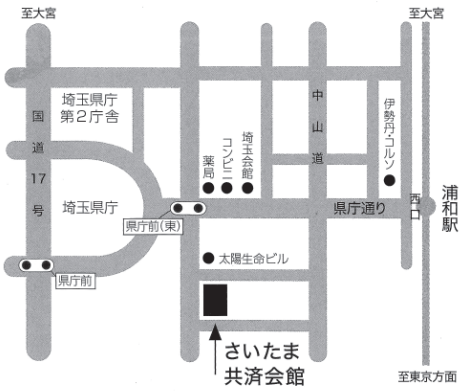
【夏　行】　第１日目：令和５年７月 29 日㈯
午後１時～５時（午後 12 時 30 分受付）
第２日目：令和５年７月 30 日㈰
午後１時～５時（午後 12 時 30 分受付）
第３日目：令和５年７月 31 日㈪
午前 11 時 30 分～５時（午前 11 時受付）
※第３日目の開始時刻は１時間 30 分早くなっております。

【会　場】　JR 浦和駅東口「浦和パルコ」９階および 10 階
浦和コミュニティーセンター
第１日目／第 15 会議室（９階）
第２日目・第３日目／第 13 集会室（10 階）

【参加費】　夏行：各日 1,000 円

事業部

全国大会会場
さいたま共済会館



JR浦和駅西口より徒歩10分

令和５年水明全国大会・懇親会のご案内

令和５年水明全国大会をご案内申し上げます。前年度は周年記念式典の趣旨もあり、会場をロイヤルパインズホテル浦和にて開催いたしましたが、本年度は「さいたま共済会館」にて開催いたします。

誌友・同人・季音同人の皆様にはご理解の上、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

■令和５年水明全国大会

日　時　令和５年６月 25 日（日曜日）
受付時間11時30分　開会12時　閉会17時00分

会　場　さいたま共済会館　６階 601 号室
〒336-0064さいたま市浦和区岸町７－５－14
℡048－822－3330

行　事　水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の授賞、新誌友紹介者の表彰、季音同人、新同人の紹介、兼題入選句の発表と授賞、講評等。

■水明懇親会（第 93 周年）

日　時　令和５年６月 25 日（日曜日）
受付開始17時00分　開会17時30分　閉会20時30分

会　場　さいたま共済会館　６階 601 号室／ 602 号室

行　事　受賞者のご挨拶、アトラクションなど

■参加費（水明 85 周年記念全国大会より減額）

令和５年全国大会・懇親会	15,000 円
令和５年全国大会のみ	3,000 円
懇親会のみ	12,000 円

■申込締切

令和５年６月５日（月曜日）
添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

※なお、参加費を振込にて別途送金される方は、指定「申込書」の「申込金支払方法」の振込をチェックしてください。

※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。

◎全国大会は貴重な機会です。永年の会員の方々は勿論、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

令和５年水明全国大会実行委員会　実行委員長

水明通信

茂木和子さんと胡蝶蘭

水明三月号で茂木和子さんは「我が家の窓より」に胡蝶蘭について書いておられる。

二〇一九年の全国大会で頂いた胡蝶蘭を大会終了後発行所に飾った。元気がなくなっても誰も引き取り手がいない。茂木和子さんが持ち帰って下さった。

あれから五年、すっかり忘れていたが毎年咲いているという。難しい胡蝶蘭をびっくりした。

和子さんは葉っぱ一枚からでも見事に花を咲かせる花咲爺いや婆いや小母さんである。（大村節代）

特集 俳句の新しい風 ― 作品競詠

特別企画 俳人と寺 ― 11寺巡礼

巻頭作品10句

井上弘美・恩田侑布子・岸原清行
白岩敏秀・辰巳奈優美・戸恒東人
山﨑十生・渡邉美保

俳壇

6月号

5月14日発売
定価900円（税込）

巻頭エッセイ
池田澄子

八木健 選 滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅲ期］……松尾隆信・長嶺千晶

連載

俳人の住む町 … 花谷 清・柴田南海子
俳句文法 そこが問題、そこがポイント … 井上泰至
自句自戒 …… 若井新一
名句のしくみと条件 …… 坂口昌弘
私の本棚・私の一冊 …… 河原地英武
十二か月添削教室 …… 前北かおる

俳句と随想12か月 井上論天・清水和代

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

風　声

○**現代俳句**三月号――「現代俳句年鑑２０２３を読む」欄
遠藤寛子氏の感銘の一句に
飛魚の一瞬鳥の面構へ　池田雅夫
同氏の感銘十句抄に
ふらここをぐんぐん漕いで言ふ本音　石田慶子
櫛部天思氏の感銘十句抄に
三峯の狼の吐く淑気かな　飯田忠男
○**現代俳句**三月号――「現代俳句の風」欄
千年の一本桜と生くる村　岡田宣子
初虹の見ゆる独房格子窓　近藤徹平
春雷の紛れこみたる街明り　宮崎チアキ
鳥帰る紀淡はるかに潮佛　田寺玲子
○**現代俳句**三月号――「現代俳句の風―秀句を探る」欄
鵜川伸二氏の感銘十句抄に
初虹の見ゆる独房格子窓　近藤徹平
○**天塚**（宮谷昌代主宰）三月号――「珠玉一句」欄
しめやかに蜜柑の筋を取る女　**鬼之介**
○**くぢら**（中尾公彦主宰）三月号――「受贈俳誌美術館」欄
買初に「日比谷花壇」のばら五本　**鬼之介**
○**幻**（西谷剛周主宰）三月号――「受贈誌拝見」欄
飴切りの音出囃子に七五三　**鬼之介**
○**好日**（高橋健文主宰）三月号――「受贈誌御礼」欄
冬麗やわが心中のスナイパー　**鬼之介**
○**新月**（松田碧霞代表）三月号――「受贈俳誌紹介」欄
次の間をにほはす雪見障子かな　**鬼之介**
○**太陽**（吉原文音主宰）三月号――「受贈誌御礼」欄
次の間をにほはす雪見障子かな　**鬼之介**
○**玉梓**（名村早智子主宰）三・四月号――「他誌拝見」欄
荒巻や荷札のむかし懐かしむ　**鬼之介**
○**菜の花**（伊藤政美主宰）三月号――「諸家近詠」欄
行平にいま会心の冬至粥　**鬼之介**
○**山彦**（河村正浩主宰）三月号――「諸家近詠」欄
冬麗やわが心中のスナイパー　**鬼之介**
○**鶴**（鈴木しげお主宰）三月号――「現代俳句を読む」欄
谷ゆう子氏の鑑賞により
かなかなや母の体内出でし刻　由良ゆら女
「水明」十一月号　先日中学生を持つ娘に誕生祝のラインを送った。「貴女は十二時間の難産だったよ。」わざわざ言うまでもないことだったが、掲句に照らし合わせると、実になまなましく、神々しい瞬間が浮かんでくる。夏の末のかなかなの鳴く刻限生まれ来た作者。体内を潜るあかんぼの目線での一句である。その発想の斬新さに魅かれる。今この時誕生の神秘と来し方を思う作者が見えてくる。
○**谺**（山本一歩主宰）三月号――「受贈誌の一句」欄
木曽晴れて祭の如き吊柿　新　暦文
新しき障子運ばれ阿弥陀堂　梅澤輝翠
（日髙道を抄出）

後記

五月号は恒例の水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、山紫賞、鼓笛賞の六賞を受賞される方々の発表とお喜びの声をお届けします。

受賞の皆様は、各々に努力をされて賞に至ったと思います。特に今年は新珠賞に応募される方が多数で激戦でした。応募された方々のレベルも高く新珠賞にふさわしい作品も数多ありました。受賞をのがした方々は、来年いま一度、挑戦して頂きたいと思います。

今年の全国大会は、従来行っておりましたパインズホテルからさいたま共済会館に、会場を変えて開催する事になりました。はじめての会場なので、様子は分かりません。しかし費用はパインズホテルに比べて、格安となり、出席しやすいと思います。どうぞ多くの方のご出席をお待ちしております。

そして、皆でご受賞される皆様をお祝いしましょう。

季音雪欄作家の石井喜恵氏が、句集「風を踏む」を上梓されました。鬼之介主宰は長く素晴しい序の最後に次の句を贈られています。

野の風を踏みゆく少女うららけし　鬼之介

この句は句集名となった

葛の花風を踏み行く山路から　喜恵

に応えたお句でしょうか。また、画家でいらっしゃるご長男の抽象画が表紙を飾る。題名通りの美しい句集です。尚、句集「風を踏む」がお手元になく、お読みになりたいと思われる方は、喜恵氏にお電話なさって下さい。残部がすこしおありのようですから、お譲り頂けると思います。

コロナがまた増加しているようです。どうぞお気をつけて。

（節代）

今月のはてな？

石蓴（あおさ）
魚味始（まなはじめ）
裹（つつ）む
嘉（よみ）す
宛（さなが）ら
吹越（ふっこし）
耕（たがやし）
阿娜（あだ）
稀覯本（きこうぼん）

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：**（月・火・水・木・金）**

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

頁　15　26　40　56　60　64　71　75　91

水明

令和五年五月号
通巻一一一二号
令和五年五月一日発行

発行所　水明俳句会
〒330-0064　さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二
電話　048−822−四七四一

ホームページ
「水明俳句会」で検索

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三

発行人　山本鬼之介
印刷所　中央美版

令和５年水明全国大会・懇親会 参加申込書

〈申込締切　６月５日(月)〉

１．全国大会・懇親会参加　　会費 15,000円

２．全国大会のみ参加　　会費　3,000円

３．懇親会のみ参加　　会費 12,000円

※上記の希望項目の数字を〇で囲んでください。

上記参加費を添えて申し込みます。
※なお、参加費を振込で別途送金される方は、下表の「申込金支払方法」の振込を〇で囲んで下さい。

2023 年　　月　　日

住所	〒		
氏名		電話	（　　）
申込金支払方法	現金	振込	

（申込書送付先：〒330－0064　さいたま市浦和区岸町4－10－21）
水明俳句会

［緊急連絡先電話番号］

電話番号	（　　）
電話所有者	

（緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時に使用し他の用途には使用致いたしません。）

きりとりせん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音 雪月花

七月号 五月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き・り・と・り・せ・ん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

八月号　五月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

八月号　五月二十五日締切

氏名（俳号）

五月の兼題　「蚕豆」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

阿修羅にもいくさの記憶遠山火　十倉和子
薔薇の芽に棘人間に毒舌　永野史代
矛先の些か外れて春の風　西山貴美子
ほのぼのとかはたれどきを雛の灯　波多野寿子
ささごとや丑三つ時の雛たち　星野和葉
日当るも昃げるも嬉し春の山　茂木和子
すべり台一直線に下りて春　大場順子
春埃舞ふ白日の兜町　正木萬蝶
切り貼りの花の浮き立つ春障子　梅澤佐江
億万の星の降臨ミモザ咲く　森本早苗
我先に世間見たがる土筆かな　鳥羽和風
飛び石を奪ひ咲きたる犬ふぐり　井上燈女
物干しに踊る猿股春嵐　曲淵徹雄
揺り椅子にありし日の夫春の闇　笹本啓子
春の夢いつの間にやら妻の顔　日高道を
魂のいくつ消えゆく名残雪　青木鶴城
「君の名は」と声を掛けたし寒牡丹　保坂翔太
土踏めばビオラの音色水温む　檜鼻ことは

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道＜身辺トピック＞

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明＜随筆＞

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

浅はかなヒト科となりし紀元節　篠﨑紀子
海眠る哀しき町のしらすぼし　森下山菜
春浅し空は浅葱になりぬれど　菅原真理
列車待つまつ毛に溶くる春の雪　新暦文
門衛の青き制服入社式　梅澤輝翠
玉子酒まろき女の謀　越田栄子
私生活話したがらぬ官女雛　新井のり子
春寒し迷惑さうな犬の靴　池田珪子
観梅や「月の桂」に逢ひにまた　清水桂子
春泥を避けて着地の滑り台　岡田宣子
笹舟のレガッタ春の空の下　反町修
曇りなくシンク磨くや春浅し　元田亮一
風花をうけて見上ぐる二年坂　菅原卓郎
袖に触れ揺らぐ大社の赤椿　丸屋詠子
春の野に先ゆく猫を見失ふ　山岸久美子
跳ね起きる枝に目覚めぬ山の春　西幅公子
試験場へと向かふ十五に春の雪　小林京子
玉眼の仁王ちらりと落椿　阿部幸代

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和五年五月一日発行　毎月一日発行
（第九十六巻　第五号）　定価　一〇〇〇円